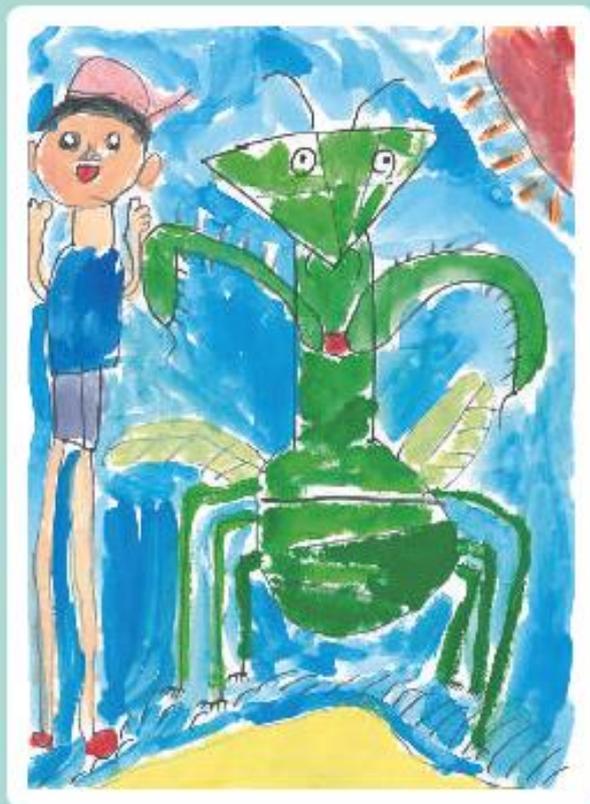


令和3年度 長崎県障害者週間作文・ポスター集

出会い、ふれあい、心の輪

— 障害のある人とない人との心のふれあい体験を広げよう —

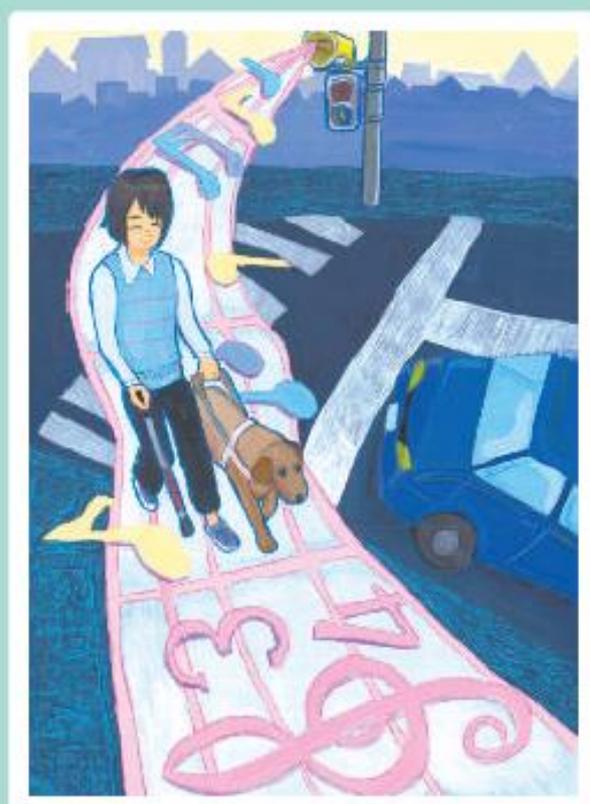


令和3年度 長崎県「障害者週間のポスター」
小学生部門 長崎県知事賞（最優秀賞）

「カマキリをつかまえたよ」

もりほろか こうどう
おばまの森放課後等デイサービスそら

いとう ゆうせい
伊藤 悠晴さんの作品



令和3年度 長崎県「障害者週間のポスター」
中学生部門 長崎県知事賞（最優秀賞）

「理想に近い世界」

させぼ しりつふくいしちゅうがっこう
佐世保市立福石中学校

よしうら じゅんあ
吉浦 純愛さんの作品

〈 12月3日～12月9日は障害者週間です 〉

はじめに

国は、「国際障害者デー」である十二月三日から九日までの一週間を「障害者週間」と定め、毎年、この時期を中心に、障害や障害のある人たちへの理解を深め、障害者の自立や社会参加の推進に資するための様々な取り組みを行っています。

「心の輪を広げる体験作文」と「障害者週間のポスター」の募集は、障害者週間の取り組みの一環として、障害のある人への理解促進のために、内閣府と都道府県、指定都市が共催で実施しているものです。

作文は「出会い・ふれあい・心の輪 障害のある人となない人の心のふれあい体験を広げよう」、ポスターは「障害の有無にかかわらず誰もが能力を発揮して安全に安心して生活できる社会の実現」をテーマに募集したところ、多くの方々からご応募をいただき感謝申し上げます。

県では入選作品による「作文・ポスター集」を作成し、素晴らしい作品の数々を県民の皆様にもご紹介しております。

県におきましては、「長崎県障害者基本計画（第四次）」等に基づき、「障害の有無にかか

わらず、誰もが住み慣れた地域で、自立した生活を送り、互いに優しく接し合うことができ
る社会環境の中で、社会を構成する一員として、共に地域を支え合い、あらゆる社会活動に
参加することができるとして、平和な共生社会」の実現を目指して、心のかよった施策の推進に努め
ているところです。

この作文・ポスター集に収められた作品群の持つ思いやりや優しさ、勇気やたくましさ、
障害のある人とならない人との交流やお互いの理解を深める一助となり、心豊かな共生社会の実
現に向けた更なる力となることを確信しています。

令和三年十二月

長崎県福祉保健部長

寺原朋裕

目次

作文

小学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）	島原市立第一小学校	林	六年	1
私の病気	南島原市立有家小学校	荒木	四年	3
長崎県教育委員会教育長賞	南島原市立南有馬小学校	本多	二年	8
かほちゃんが教えてくれたこと	島原市立第一小学校	森	六年	10
長崎県社会福祉協議会会長賞	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6
相手の立場に立つこと	時津町立鳴鼓小学校	蒲池	四年	5
長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞	佐世保市立大久保小学校	向井	五年	6
障害者体験を通じて学んだこと	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6
長崎県手をつなぐ育成会会長賞	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6
つりに行くのがたのしみ	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6
長崎県知的障がい者福祉協会会長賞	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6
障害者をささえるために大切なこと	南島原市立南有馬小学校	向井	五年	6

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

平和な世界へと

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

私と友達

中学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）

ありのままを受け入れる社会

長崎県教育委員会教育長賞

私の弟

長崎県社会福祉協議会会長賞

障害をもつ弟の生活

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

たった一言

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

笑顔と福

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

弟の苦しみ

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

障害のある人の心の強さ

大村市立三城小学校

徳永好香

12

佐世保市立清水小学校

森優愛

14

長崎県立長崎東中学校

松尾果凜

16

長崎県立長崎東中学校

富川怜美

18

諫早市立北諫早中学校

服部好花

20

対馬市立豊玉中学校

小川凜子

22

諫早市立北諫早中学校

川原旭陽

24

長崎市立淵中学校

岡崎彦太

26

長崎南山中学校

小方充力

28

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

可愛いあの人

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

気遣いの仕方

佳作

みぢかにバリアフリーを！

佳作

心の「輪」を広げる

高校生・一般部門

長崎県知事賞（最優秀賞）

歩んだ道。そしてこれから歩む道

長崎県教育委員会教育長賞

自分と相手

長崎県社会福祉協議会会長賞

私が目指す未来

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

私にしかできないこと

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

障害とともに生きる

佐世保市立柚木中学校

森山和奏

三年

30

長崎南山中学校

東直樹

一年

32

諫早市立北諫早中学校

秋山実優

二年

34

諫早市立北諫早中学校

森翔平

三年

36

向陽高等学校

服部嵯介

二年

37

長崎県立諫早農業高等学校

東理奈

三年

40

長崎県立口加高等学校

古瀬優

二年

42

向陽高等学校

萩原彪

一年

44

長崎県立ろう学校

塚根みづな

一年

46

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

私の兄

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

ごめんなさい。そしてありがとう。

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

触れ合いを通して学ぶこと

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

感謝よりも感謝

佳作

出会い、関わり成長する

佳作

虚心坦懐

長崎県立口加高等学校

向陽高等学校

長崎県立口加高等学校

長崎県立諫早農業高等学校

長崎県立諫早農業高等学校

長崎県立諫早農業高等学校

坂木心

楠本奈美

相良琴美

藤田菜優

菅野未空

高橋美祈

二年

一年

二年

二年

三年

二年

49

51

54

56

59

61

長崎県知事賞(最優秀賞)

私の病気

島原市立第一小学校

六年

林 真緒

私は、先天性ミオパチーという病気を持って生まれてきました。先天性ミオパチーは、十万人に三〜五人、国内に千〜三千人います。この病気の特徴は体が柔らかい、筋力が弱い、筋力低下、つかれやすい、偏平足、朝なかなか起きられない、十分睡眠をとっても日中、眠いなどいろいろな症状がありますが、一言でいうと、筋肉が他の人とはちがう特徴をもっているということです。そのため学校ではみんなと生活のしかたが違ふところがいくつかあります。

一つ目は、シューズに足底板という装具を入れているので、みんなと同じシューズを履くことができせん。

二つ目は、脊柱側弯症けいせきそくわんしやうもあるので、椅子にも姿勢維

持のための装具をつけています。

このように、他の人と違ふところがあるため、初めて会う人に、「かわいそう…」、「障害だから…」、「特別…」と言われることがあります。私は、治らない病気だから、きつとこれからも、一生言われる。そう覚悟してはいますが、同情されるのは、少し嫌でした。でもだからといって、「同情しないで。」というのも嫌でした。だから、同情されてもいいから、理解を深めてもらおうと、できるだけ、自分の病気のこと話すようにしています。

そんな私にクラス友達は、いろいろなサポートをしてくれます。

私は、走るのが遅いので、運動会のリレーの時は、

チームのリーダーが、バトンゾーンなどの位置に立つのか、順番はこうしよう。など話し合っていて、私が走っても、スムーズにリレーが進むようにしてくれます。

また、マラソンの練習の時は、みんなが終わっても私だけ終わらないことが多いので、走り終わった人も私のペースに合わせて、もう一度一緒に走ってくれたり、ずっと、「がんばれ!!」「あと〇周!!」と声をかけてくれます。

それと私は、椅子に装具をつけているので、重くて自分で運ぶことができません。すると、必ず友達が、「私が見つから、真緒ちゃんは私の持つて。」と自分の軽い椅子と交換して持ってくれたりします。

去年は、友達二人で、どちらが私の椅子を持つかで喧嘩になることもありました。その時は、喧嘩を止めるのが大変でしたが、とてもうれしくなりました。

こんな私のことを理解してくれている友達が、大人になった時、私と同じ病気や、体が不自由な人に出会ったら、きっと、やさしく声をかけをしたり、サポートしてくれるだろうと思います。そして、そういう人がどんどん増えていけば、体が不自由な人も、住みやすい世の中になると思います。

私は、自学で自分の病気について調べたり、足が不

自由な人や体が不自由な人のことを知るセミナーがあったら行くようにしています。

そして、私も、もっと、自分の病気や他の難病などについても勉強していきたいと思います。

そして、少しでも、そんな人達ときずなを深めたり、手助けができる人になりたいです。

長崎県教育委員会教育長賞

かほちゃんが教えてくれたこと

南島原市立有家小学校 四年

荒木 円 愛

わたしは、この夏、新しい出会いがありました。名前はかほちゃん。かほちゃんは、お母さんのお友達の子どもで、笑顔のかわいい一年生の女の子です。お母さんといっしょに会いに行った時、ドキドキしながら家の中に入ってみると、

「こんにちは。」

と、ゆかをはってむかえてくれました。

かほちゃんは、外では車いす、家の中で動く時は、はって生活しています。千三十グラムと小さく生まれて、小児のうせいまひの中でも、特にむずかしい病気で、両足と体の左がわにまひがあるということをお母さんから聞きました。お家では、にっこり笑顔でわたしの名前をよんでくれて、お話ししたりお絵かきしたり、

お人形で遊んだり、とても仲よしになりました。お絵かきやお人形遊びをする中で体が安定しなくて、左がわにかたむいてしまうので、わたしはかほちゃんの手をささえました。

「ありがとう。」

のかほちゃんの言葉がすぐうれしくて、あたたかい気持ちになりました。字がとっても上手で一生懸命書いたり、右手を上手に使ったりしてすごいなあと思いました。

「学校楽しい？」

とわたしが聞くと、

「うん、楽しいよ。お友達が車いすをおしてくれたり、やさしくしてくれるよ。」

と言いました。かほちゃんには四つ年上のお兄ちゃん
がいて、今はお兄ちゃんと同じ小学校に通っているけ
ど、お兄ちゃんが卒業したら、とくべつしえん学校に
行くことを話してくれました。かほちゃんのお母さん
が、今の学校だとお友達や先生にめいわくをかけて生
活しているとかほちゃんが思っているようだから：と
言われていました。わたしは自分の気持ちを人に言う
ことが苦手なのに、かほちゃんは、自分の考えをしつ
かり持っていてすごいなあと思いました。

いつか歩けるようになりたいと一才からリハビリを
がんばっているかほちゃんのすがたを見て、わたしは
たくさんのゆう気をもらいました。かほちゃんから「大
切に生きる」ことを教えてもらいました。かほちゃん
は、わたしの自まんの友達です。

長崎県社会福祉協議会会長賞

相手の立場に立つこと

わたしの妹や友達の中で、両耳がきこえづらい人がいます。妹や友達は、両耳にほちようきをつけています。ほちようきをつけていないと、人の言葉が聞こえづらく、つけていても聞こえないことがあります。

ある時、妹がわたしに「なんでみんな聞こえるんだろう。わたしもほちようきをつけなくてもいいようになりたい。」と言いました。わたしは、ほちようきをつけてみたい。と思いました。理由は、妹の耳のきこえづらい世界を体けんしてみたいと思ったからです。このことをお母さんに話したら「みんながゆづきのように考えてくれたらいいね。相手を思いやれるからね。」と言われました。わたしは、妹のことを思いやったつもりはなかったけど、お母さんのいうように相手の立

場に立つと、分かることもあるんだと思いました。

これからは、妹の思いやしようがいをもって人の立場に立つて考えていきたいと思っています。そうすることでもつながり助け合えると考えます。

佐世保市立大久保小学校 四年

蒲池結月

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

障害者体験を通じて学んだこと

時津町立鳴鼓小学校

五年

向井啓恭

ぼくは、学校のじゅ業で車いす、アイマスク体験をしたことがあります。

車いす体験では、坂の上り下りの時に押してくれる人がいないと自分で進むことは難しいです。もし、町の中に障害物があることを考えると車いすの人は本当に大変だと思います。

逆に車いすを押すときは、声かけ、スピード、けいしやさせるきょうふ感を確認する等の心配りが必要だと思います。

アイマスク体験では、平道でしたがフラフラしてこわかったです。目の不自由な人は、毎日危険な思いをして歩いているんだなと思いました。

また介助者では、同じ立場にたって案内することが

大変でした。

この二つの体験を通して、ふだん生活していることを考えると、歩道の障害物に問題があると思いました。歩道に置いてある自転車やゴミ、点字ブロックに車をとめたりする人、それから前を向いて歩かない人もいます。

車いすの人や目の不自由な人は、小さな危険でも命に関わります。住みややすくすることをお互いに考えて工夫して生活することも大切だと思います。

そして、車いすや目が不自由な人を温かく受け入れる気持ちが重要です。周りの人たちから白い目で見られることは辛いことだと思います。温かく受け入れられることはうれしいことだと思います。

「自分には、関係ない」ではなく、「もし自分がこうなったら」と同じ立場になって気持ちを受けとめ、真ん中に考えることが大切だと思います。

これからは、障害がある人もない人も平等に過ごすために、障害者だからといって、差別やかわいそうなどとは思わないで、誰とでも同じように接したり、もし町の中で障害者を見かけたら、

「大じょうぶですか。」

とやさしく声をかけて助け合ったりして、みんなが生活しやすい社会をつくりたいと思います。

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

つりに行くのがたのしみ

みなみしまはらしりつみなみありましよがっこう
南島原市立南有馬小学校 二年

ほん だ たく ま
本 多 巧 磨

ぼくは、おじいちゃんをつりに行くことを、たのしみにしています。なんてつりに行きたいのかというと、今まで一ども行ったことがないからです。

お父さんに、
「つりに行きたい。」

と、聞いたら、お父さんは

「おじいちゃんのほうがうまい。」

と言いました。だから、ぼくは、おじいちゃんをつりに行くやくそくをしました。

しかし、つりに行く前に、おじいちゃんは、ユニボといっしょに道から下のはたけにおちて、大けがをしてしまいました。

ドクターヘリで大きなびょういんにはこばれ、にゅ

ういんしました。

ぼくは、一回だけお見まいに行きました。

「早く元気になってね。」

と、ぼくは言いましたが、おじいちゃんは何も言いませんでした。

それから、おじいちゃんは、リハビリをがんばって、たいいんしました。今は車いすにのっています。お父さんは、おじいちゃんの分もおしごとをしています。おじいちゃんも手つだうときがあります。

ぼくがつりに行きたいことを、お父さんがおじいちゃんに言いました。そしたら、おじいちゃんはいえでも立つれんしゅうをしています。

だから、ぼくはおじいちゃんをつりに行きたいです。

ぼくが、

「マグロをつりたい。」

と言ったら、お母さんがわらいました。

早くつりに行きたいです。

お父さんにつれていってもらって、ぼくがおじい

ちゃんの車いすをおします。

おじいちゃんが大ものをつるかもしれません。

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

障害者を支えるために大切なこと

しまばらしりつだいちしょうがっこう
島原市立第一小学校 六年

もり
森 ひなた

私は、この前二十四時間テレビをおばあちゃんと見ていた時、何気なく

「目が見えないのと、耳が聞こえないのと、足が動かないのではどれがいい。」

と、聞きました。おばあちゃんは、少しなやんでから「うーん耳かな、目が見えなかったり、足が動かない方が大変そうだから。」

と言いました。私も、「同じ。」

と答えました。私のまわりには障害のある人がいます。だからテレビでみたり、たまに買い物に行ったときに車イスの人を見かけるだけです。そして不自由だろうな。かわいそうだな。と思うだけでした。声をか

けたこともないし脳性マヒで見るからにふつうで障害があるように見えない人はすこしこわいと思いました。

でも、パラリンピックを初めて見ておどろきました。手がなくても、足がなくても、一生けん命泳いだり卓球をしたり、目が見えなくても、かすかな音をたよりにプレーしていたのです。しかも五体まんぞくな私より上手でした。この人達はどれだけ練習したんだろうと思います。そしてみんなキラキラかがやいています。インタビュ어도だれ一人として自分のからだのことをなんとも思っていない。それどころかどうしようと見えます。もし、私が生まれつきそんな体だったら。病气や事故でとっぜん動けなくなったら。と考

えました。こんな風にがんばれるだろうかと今までの自分がかしくなりました。

私の学校では、年に何度か特別支援学校の人と一緒に遊んだりしているので今までよりも、もっと仲良くなりたいと思います。そして障害のある人達が今よりたのしく生活できるように、障害のある人のことをわかって支えていくことが一番大切だと思います。

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

平和な世界へと

大村市立三城小学校 五年

徳とく 永なが 好この 香か

今年は、コロナ禍で、障がい者と直接ふれあうことができなかったのですが、図書館で本を借りて、本の中でふれあいました。その本の中でふれあった体験を書きました。その本の題名は、「目もみえない 耳もきえない でも ぼくは笑っている」という障がい児三人をえがいた物語で、三人とも障がいを持っているという物語です。

私は、この本を読んで、不幸な人はだれ一人いないということに気づきました。たとえ障がいを持っていない人も、障がいは自分のことが好きで、不幸だと思っていないから、不幸な人はだれ一人いないって思うんです。

主人公である洋平は、脳の左半分がほとんどなく、

目もみえず、耳もきこえない重い障がいを持っています。きついはずなのに、お父さんとお母さんといっしょに、「二十才までがんばって生きる」と約束したことを忘れずに、一生懸命がんばっているすがたに、感動しました。私は、生きることが当たり前で普通に明日をむかえることができると思っていました。でも、障がいを持っている人は、きついことにたえないと、明日をむかえられないと、私は思いました。そう考えてみると、私の当たり前という考えは、あまかったかもしれません。次からの考えは、あまくないように気をつけようと思います。

私は、障がい者について二つのことを考えました。一つ目は、「障がい」という名前についてです。障

がいを持っている人のことを短くいうと「しょうがいしゃ」といいます。漢字で書くと「障害者」と書きます。でも、「害」という字は、あまりいい意味の字ではありません。なので、最近では、「障がい者」や、「障害者」などと書くようです。私は初めて知りました。なぜなら、「障がい者」という字に、目を通すことをしなかったからです。私はこの本を読んでから、「障がい者」という字に、自然に目を通すことができるようになりました。本の力はすごいですね。

二つ目は、いじめ、また、さべつについてです。いじめとは、どういうことから始まるのでしょうか。私は、ストレスだと思います。ストレスがたまりにたまって、がまんできなくなると、ついつい人にぶつけてしまふ。それがいじめだと私は考えました。でも、問題はさべつのほうだと思います。私は、障がい者のことを、そんなにいやな人だとは思っていません。でも、なんかやだなと思って、つい口に出す人もいます。なぜそんな考えを持つのでしょうか。それは自分がふつうだと思っているからだ、私は考えました。この世界にふつうな人間はいないと思います。人間は多数決みたいなもので、障がい者とそうでない人をくらべると、そうでない人の方が多いです。なので障がいを持つ

ていない人がふつうの人になります。でももしそれが逆だったら、障がい者は、ふつうの人になります。そう考えていくとふつうな人はいないと思います。だからほかの人もこういう考えを持ってほしいと私は思っています。

これからは、みんな笑顔であふれる世の中になってほしいと願っています。

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

私と友達

ようち園の時、車いすでたまに遊びに来る友達がい
ました。初めて会った時は、どうして車いすに乗って
いるのかなと思いました。車いすは、けがをした人が
乗る物だと思っていました。私もけがをしたときに乗
りました。私が乗った車いすとちがって友達の車いす
はその子のサイズにあったものでタイヤにイルカの絵
が書いてありました。

その子はあまりしゃべれなかったけど、少ない言葉
を聞いておたがいの気持ちをうじ合わせながら遊べ
るようになりました。車いすをおしたり、使いたい物
をとったりしました。ときには、昼ごはんをいっしょ
に食べたり遊んだりした事もありました。

私がつちゅうでちがうようち園に通いはじめて、そ

佐世保市立清水小学校

四年

森

優

愛

の友達とはなればなれになってしまいました。びっく
りする事にその一年後その友達と小学校で再会するこ
とができました。一年も会っていないのに私も友達も
おたがいの事をおぼえていました。

それから私と友達は同じクラスになりました。二年
生の時も同じでしたが三、四年生とつづけて同じクラ
スにはなれませんでした。だけど昼休みに友達が私の
所に来てくれてカードやダンスをして遊んだので楽し
かったです。一番うれしかった事は、私のたん生日の
時にいわってくれてパンケーキを作ったりカレーを食
べたりした事です。

友達と出会って、遊んでいく中でどんなしょうがい
があってもなくてもかべを作らず仲よく遊ぼうと思

ました。

去年じゆぎょうで手話について学習しました。私はそれから手話って大切なんだなと思いつつ練習をするようになりました。今はあ行からた行までできるようになりました。これからも少しずつ練習をして耳が聞こえない人と会話をして仲よくなりたいです。

長崎県知事賞（最優秀賞）

ありのままを受け入れる社会

長崎県立長崎東中学校 三年

松尾果凜

「果凜ちゃんは、そのままが素敵だよ。」

これは、小学生の頃、私の友達が私にかけてくれた言葉です。私は小さい頃に発達の凸凹があると診断され、小学校で週一〜二回通級指導教室に通っていました。

特に感情のコントロールが苦手で、「負ける」「出来ない」という状況下では、心が悲しみていっばいになり、かんしゃくを起こしたり涙が止まらなくなったりしていました。一度その状態になると気持ちを切り替えることが難しく、一日中暗い気持ちで過ごすことも多かったです。

私は自分のそんなところが大嫌いでした。かんしゃくを起こしている自分はまるで自分ではないような感

覚もありました。生まれつきの特性とはいえ、友達にはただのわがままにしか映っていなかったと思います。周りから「わがまま」と言われるたびに、なぜ自分はこれほどに負けることを受け入れられないのか、気持ちの切り替えができないのか、嫌でたまらず、変えたいと思っていました。

あるとき私は失敗したことを同級生にからかわれ、泣きながら教室を飛び出してしまいました。そんなとき、私を追いかけてきてくれた友達がいました。彼女は泣いている私を見て、こんな言葉をかけてくれました。「果凜ちゃんは、悔しくて泣いちゃったんだよね。からかう人もいるけれど、果凜ちゃんはあるのままでいいんだよ。そのままが素敵だよ。」

私にとって目から鱗の言葉でした。私はずっと嫌だと思っていた特性を、彼女はありのままに受け入れてくれたのです。このときから私は少しずつ自分のことを受け入れられるようになり、徐々にかんしゃくを起すことも減っていったように思います。

最近、学級崩壊に関する記事のなかで、発達障害の子どもが増えていることが原因として挙げられているのをよく見かけるようになりました。また、大人の発達障害についての記事もインターネットでよく目にします。記事に対する一般の人のコメントを読むと、発達障害の人に対して「迷惑」といった厳しいコメントが多く、とても胸が苦しくなります。多くの人は、発達障害は脳の障害であることを理解していても、共感したり受け入れたりすることは難しいようです。「わがまま」「振り回される」という言葉を見るたびに、見た目でわからない分、誤解されているように思います。

白い杖をついた視力に障害のある人や車椅子の人に対して、多くの人は親切に接することができます。その人たちが道端で困っていたら「助けてい」と思う人が多数派で、「振り回される」と感じる人は少数派ではないでしょうか。でも発達障害の人には、「助けよう」

「理解しよう」と思う人が少ないように思うのです。

見た目でわかりにくいということは、どう接すればよいか、どのように助けたらよいか伝わりにくいのだと思います。私は発達障害の人は、まず自分の得意なことや苦手なことを周りの人に知ってもらおう工夫が必要だと思います。また、周りの人も自分の価値基準でその人を決めつけるのではなく、その人の生まれつきのものであるものではないかと想像することが大切です。発達障害の人は周りに理解者がいれば、良いところを伸ばしていく力を持っているように感じるからです。

今でも私は負けず嫌いです。「人に負けたくない」という気持ちが目の前の課題に立ち向かう力になっています。私は他者のことを自分の価値基準で決めつけるのではなく、「この人は生まれつきこういう特性を持っているのかもしれない」と想像して接することができる人になりたいと思います。あるとき、私を助けてくれたあの友達のように。

長崎県教育委員会教育長賞

私の弟

長崎県立長崎東中学校 二年

富川 怜美

私には一つ下の弟がいます。彼はダウン症です。ダウン症という障害は、二十一番目の染色体が人よりも一本多いため知能や心臓、その他の成長に影響をもちます。私の弟も生まれたとき、心臓に穴があり新生児集中治療室という場所に一ヶ月ほどいたそうです。

また、弟は一才八ヶ月のときに急性骨髄性白血病に罹り、半年間治療のため病院に入院していました。両親は、弟の世話をするため、私は離島にある父の実家へ預けられました。そのとき私はまだ三才だったのでその事について説明されても意味が分からず、「ああ、私は捨てられてしまったんだ。」と思っていました。弟が退院してからもその考えは変わらず少し嫌な思い

出として引かかかっていました。

弟が小学生になった頃、足し算ができたり、ひらがなを読めたりしただけで褒められ、私はできて当たり前という感じで、ずるいなと思ったものです。そのようなエピソードが積み重なり私はあまり弟のことが好きではありませんでした。

そんな中、小学校の高学年の頃、同級生の男の子が私の弟をまるで自分の弟のように可愛がってくれました。そして、ある日その男の子から「お前の弟を俺にくれ。」と言われて、私は咄嗟に「嫌だ。」と答えました。嫌いだったはずなのに私は弟がいなくなるということに嫌だと思ったのです。そのとき私は、弟のことを大切に思っている自分に気づきました。

どうしてそう思えたのか考えると、弟にはいい所が沢山あることに気づいていたのです。ダンスと歌が好きで、流行の曲を歌って踊っているところ、道行く人に声をかけてすぐに仲良くなってしまふところ、褒められるとすぐに調子にのるところなどがあり、そんな弟が好きな自分がいきました。中でも一番好きなのは弟の持つ優しさです。父と母が少し大きな声で言い争っていると「だめでしょ。」と叱って止めてくれたり、私が部活で思うようにできなくて泣いているときには「ねえね大丈夫？」と心配してくれたりと、さすがに「もちろん喧嘩や小競り合いなどもします。」

障害者だから守らなくてはいけない存在だとは思っていません。弟はできないことがたくさんあります。難しい漢字はまだ読めないし、縄跳びも上手く跳べません。しかし、全部できないというわけではありません。「障害者だから」と特別視しなくてもよいのではないのでしょうか。私が中学校の友達に弟を会わせるとき「面白い子だね。」と言われました。ダウン症ということを伝えても「えーそうなんだ。」としか言われませんでした。今までは、「大変だね。」とか「可哀想だね。」と言われてきたので、あっさりとした返答に驚きと同時に嬉しさを覚えました。障害があるだけで

特別視をしたり、仲間はずれにしたりすることなく受け入れる、そのような姿勢に救われる人がいると思います。

今、多様性という言葉をよく耳にします。障害があってもなくても、男でも女でも、肌の色が違っていても互いの違いを認め合って共生していくことだと理解しています。私にできることを考えたとき、まずは自分の弟を特別視することなく困っているときはさりげなくサポートすること。また、いつもと様子が違うときに、少し話を聞いて、どうすればいいのか一緒に考えるなど、足りないところを補い合うことが大切だと思います。弟に対して気がけていることを大切に、色々な人と接していけば、自然と人となりがり、心の輪が広がっていくと信じています。

長崎県社会福祉協議会会長賞

障害をもつ弟との生活

私の弟は、平成三十年三月十三日に四六〇gという小さな体で生まれました。生まれてすぐに晩期循環不全になり血圧が下がり、酸素がうまく体全体にまわらず脳がダメージをうけ脳性麻痺になりました。普通の赤ちゃんだったら、生後四ヶ月くらいたつと寝返りをしたり、離乳食を食べたりするのですが、全体的に成長が遅く、二歳になってやっと寝返りができるようにになりました。弟が寝返りができたときには、家族みんなで大喜びしました。普通の赤ちゃんと比べると、こんなにも体が成長する速さが違う事に驚きますが、障害があっても、ゆっくりと成長していることは、とてもすごいと思います。二歳半頃には、自分でお座りができるようになったり、声を出したり、よく笑う

ようになりました。弟と一緒に過ごしていくうちに前と比べるとどんどん成長しているんなことができるようになっている姿を見ると、とても感動します。今では、ハイハイができたり、「おいで！」と声をかけると手を出して来ることができるようになり、ほんとに成長したなあと感じます。これから先、いろいろなことを乗り越えて、今よりもまたさらに成長していく弟の姿がとても楽しみです。また今は、自分の力で歩いたり、たくさんできないことがあるので、家族みんなが弟ができないことができるようになるように、一緒に支え合っていきたいと思っています。これまで、障害をもっている弟と触れ合ってきて、お世話をする事はとても大変で、少しでも目をはなすのが怖かったです。

諫早市立北諫早中学校 二年

服部好花

けれど、弟がどんどん成長していくうちに、怖さもなくなっていく。今では、一緒に遊んだり、笑ったりしている時間がとても幸せだと感じます。これからも、普通の子と触れ合うような接しかたで、障害をもっていい弟と接していきたいと思えます。

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

たった一言

対馬市立豊玉中学校

二年

小川凛子

「大丈夫ですか、お手伝いしましょうか。」たった一言、声をかけることで助かる障がい者の方々は多くいると思います。

私の祖母は、手足が不自由です。杖をつけて歩く祖母のため、廊下には手すりがついています。そんな祖母を介護している母に大変ではないのか聞いてみると「介護することは、わからない事も多いけどその人の立場で考え、今何が必要なのかを思いながら声をかけ手をさしのべることが大切だよ。大変なことは多いけれど、介護することにやりがいはあるよ。」

と応えるのです。しかし私にはまだ母の言葉の意味がよくわかりませんでした。なぜなら相手の立場になって考えること、それは相手のことを思いやる気持

ちで、今ではできるけれどそのときはまだできなかったからです。

ある日、お店に入ってすぐにカゴを取って買い物をしていた時、杖をつけて足が不自由なおばあさんに気づきました。始めはどうしたのだろう、「困っているのかな」と気になったものの声をかけることはできませんでした。あと一歩の勇気が出なかったからです。その後やはりおばあさんのことが気になった私はすぐにまだいるか確認しに行きました。するとおばあさんは困った顔をしていました。やっと勇気を出して声をかけてみました。

「大丈夫ですか、お手伝いしましょうか。」するとおばあさんは嬉しそうに

「声をかけてくれてありがとうございます。カゴが高く積んであったから取れなかったの。」

私はすぐにカゴを取ってあげました。

「助けてくれてありがとうございます。」

その言葉で私は気づくことができたのです。一步の小さな勇気を出すことで相手も自分も幸せな気持ちになれるということ。

今の日本には視覚や聴覚に障がいがある人、足が不自由な人、他にもいろいろな障がいを抱えて生きている方がたくさんいます。みなさんはこのような方々がもし困っていたら声をかけることができますか。

「バスに足が不自由で松葉杖をついている人が乗ってきたとします。満席で自分が席に座っていたら、あなただったらどうしますか。」これは十代から七十代の男女三四人にアンケートを実施したものです。「譲るべき」と答えた人は七五・九パーセント「譲らなくていい」と答えた人は八・六パーセント「迷ってしまう」一五・五パーセントでした。このことから八割の譲ってあげようと心優しい人がたくさんいることがわかります。しかし、譲る気持ちがあっても譲れない理由として「断られると思った」とか「降りる駅が近いから」が多く挙げられていました。でも、障がい者の方々は

全然断る気持ちはなく、逆に

「譲ってくれてありがとうございます。」

と、嬉しくて幸せな気持ちになります。視覚障がい者の方のために一生懸命働いてくれる盲導犬は訓練センターで約六カ月から一年間訓練を受けます。そんな盲導犬達は視覚障がい者の方の行きたいところへ行くときに、交差点で止まったり、目的物を探したりしてくれまます。それなのに

「適切な量のえさを与えてもらっていないのではないかとと思うとかわいそう。」

「なぜ盲導犬を作らなくてはいけないの。」

と、悲しくなるような言葉を言う人もいます。でも、視覚障がい者の人には盲導犬は大事なパートナーなのです。このパートナーとともに、視覚障がい者の世界が広がるのです。盲導犬のように、私も誰かの手助けができるはずなのです。

「大丈夫ですか。お手伝いしましょうか。」

このたった一言が、誰かの新しい一步につながります。

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

笑顔と福

「笑う門には福来たる」これは僕の伯母が好きな言葉です。何故この言葉が好きか伯母に聞くと、「自分が笑顔になると、周りの人も笑顔になるからだよ。」と答えてくれました。

僕の伯母はとても明るくて、面白いです。ですが、二〇二〇年十月二十一日、僕の伯母はスーパーに行く途中、横断歩道を渡っている時にバイクと接触事故をしました。幸い、命に別じようはなかったのですが、右足の太ももの付け根から下が動かなくなり、車いす生活となりました。ですが、そんな状況になってもバイクの運転手に対して「大丈夫、大丈夫。私がスーパーに行っただけなら起こらなかつたし、私も悪い部分はあるよ。」と笑って許しました。僕はそんな伯母が

諫早市立北諫早中学校 二年

川原旭陽

大好きです。車いすになろうと、伯母は伯母です。ですがある日、こんなニュースを見ました。『車いすの男性に中学生が「障害、障害」と心ない言葉を浴びせる。男性は、「なりたくてなったわけじゃないのに本当に悲しい」とコメント』このニュースを見たときにぼくは自分が男性の立場だったらどう思うんだよ。嫌じゃねえのかよ。と思いました。多分、この中学生は半分冗談で言ったと思います。ですが、半分冗談が相手の心に傷をつけることを分かってほしいです。僕も冗談で相手の外見のことについて、悪口を言ったことがあります。ですが、このことを機に、冗談は相手のことを傷つけることを自覚し、行動に移そうと思います。障害を患った伯母は今車いすにも慣れ、元気に暮ら

しています。僕はどんな嫌なことがあっても笑顔でいようと思います。そうすると自然と“福”もやってくるはずですよ。

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

弟の苦しみ

長崎県立淵中学校 三年

岡崎彦太

僕には三歳下の弟がいます。弟は、現在十一歳で小学校六年生ですが、周りと同じように勉強することができません。理由は、発達障害をもっていているからです。

二〇〇九年の七月に、弟が生まれました。当時、僕は二歳で、弟が生まれたことは、とてもうれしく思いました。それから、僕と弟は健やかに育ちました。ですが僕が小学生になる頃、弟が発達障害をもっていていることが分かりました。

僕は、まだ障害の意味を理解しておらず、母親からは、成長が遅いだけと聞かされ、当時は、障害がどれだけ大変なのかを知りませんでした。だから少したてば、周りの人と同じように勉強や生活ができると考えていたのです。

僕が小学校三年生になった時、福祉の勉強にも取り組むようになりました。福祉の勉強では、体が不自由な人の生活を体験するという授業がありました。そこで僕は、弟はどのような生活をしているのか、とても興味がわきました。だから母親に、弟について様々なことを聞いてみました。弟は会話することなどは難しく、自分の思っていることを言葉にできないということが分かり、弟に対しての接し方を考えることができました。

それまで僕は、弟のことを理解しようとしていませんでした。弟は、僕や友達などに、気に入らないことがあると、かみついたり、ひっかいたりしていました。僕は弟に、遊んでいるときや寝ているときにかまれて、

何回も怪我をしました。弟が保育園に通っている時には、友達に怪我をさせて、何回も問題になり、僕は弟のことを嫌いになりました。

そして、もう一人弟がいたので、そっちの方を構うようになり、弟を無視するようになりました。

そして、小学校で福祉を勉強して弟に興味をもつことができませんでした。もし福祉を小学校で習わなければ、弟のことを理解せず、一方的に弟を嫌っていたので、弟に興味をもてるようになり、とても良かったと思います。

それから僕は中学生となり、弟は小学校高学年になりました。弟は幼い頃に比べ、とても暴れることが多くなり、気分を落ち着かせるために薬を毎日飲んでいきます。薬を多くしないと、薬の効き目がなくなってしまうので、今もずっと薬は多くなっています。しかしその薬には副作用があり、暴飲暴食などになり、身体の健康に害をもたらしてしまっています。僕は、その程度の副作用なら問題ないと考えていましたが、現実には違いました。母親から幼い頃から薬を使用しているので、寿命が平均より短くなることを聞かされて、少し悲しくなりました。人はいつまで生きることができるとは分からないから、生きるとはとても大切だと

いう気持ちが強くなってきました。

僕は、それから、弟のことを理解しようと努め、弟への対応の仕方を、改めて考えるようになりました。

そして今、僕は中学校三年生で、弟は小学校六年生となり、今も、会話をすることはできず、勉強することもできないけれど、最近では、弟も趣味をもち、今では、タブレットやスマホを使うことができます。しかし充電が切れたりして使えなくなると、暴れて騒ぎ始めるので、家族を困らせています。でも趣味のおかげで弟は、とても楽しそうにしています。もし、弟に、趣味がなかったら、今より弟はストレスを感じていて、今よりも、もっと荒れていたと思います。

僕の家族は、弟のことで、これからも悩んだり、苦しんだりすると思います。だから僕は、弟のことを、もっともっと理解したいです。

これから僕は、両親と協力をして、弟と共に、苦しみを乗り越えていきたいと思っています。

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

障害のある人の心の強さ

私は、山元加津子の『きいちゃん』を読んだ。きいちゃんという作品は、作者の実話を元に書かれている。きいちゃんという作品の中身は、障害のあるきいちゃんがお姉さんの結婚式に出ることになったが、ある日、お母さんからやっぱり結婚式に出ないで欲しいと言われた。作者の提案できいちゃんは、お姉さんに浴衣を作ることにした。小さい頃熱を出して、手足が上手く動かせなくなったきいちゃんは、指に針を刺し練習用の布が真っ赤になっても、「お姉ちゃんの結婚のプレゼントだから」と言って、ひとりで縫うことをやめなかった。結婚式の十日前に浴衣は、出来上がった。二日間程で、お姉さんのところに届き、お姉さんから電話がかかってきて、きいちゃんと、作者にも、結婚式

に出て欲しいと言われたのだ。結婚式のお姉さんは、とてもキレイだった。しかし式中に、きいちゃんを、ジロジロ見て、コソコソと話す人たちがいて、きいちゃんは、美味しいおご馳走も食べないと言ったのだ。お色直しをして、出てきたお姉さんは、きいちゃんが縫った浴衣を着ていた。そしてきいちゃんたちを前に呼び、言った。
「みなさんこの浴衣を見てください。この浴衣は私の妹が縫ってくれたのです。妹は小さいときに熱が出て、手足が不自由になったので家から離れ生活しなくてはいけなかったのです。父や母とくらしている私のことを恨んでいるのかと思いますが、りっぱな浴衣を縫ってくれました。高校生で浴衣を縫える私の妹は、

長崎南山中学校 一年

小 方 充 力
お が た み つ お

ほこりです。」

その時式場から大きな拍手が起こった。

私が一番心に残った所は、きいちゃんが指に針を刺しながらも、「お姉ちゃんの結婚のプレゼントだから」と言っただけの言葉をやめなかった所だ。本来なら、手足が不自由なので手伝ってもらってもいいと思う。だが、どうしても一人で縫うという強い意志がすごいと思った。私は、意志が弱い。例えば、夏休みの課題の習字が上手く書けずに、すぐにあきらめたり、野球で大事な時に絶対打つという気持ちがとても弱く打てなかったり、勉強しないといけないのにテレビを見たり遊んだり、楽な方に逃げてしまう。だけど、きいちゃんは、お姉さんを想ってあきらめずにやりとげた。私も強く意志を持つために、どうしたらいいか、考えた。私は、教師になりたいので、勉強も習字もいっぱいがんばらなければいけない。野球ではチームや監督の気持ちに応えたい。

この作品を読んで、障害のあるきいちゃんはあきらめずがんばっていて、自分もあきらめずがんばって生きようと思った。

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

可愛いあの人

私は、毎週木曜日にママさんバレーをしに小学校へ行きます。しかし、人数が少なくして体育館が半面空いてしまうので、ある日から母の職場の方々が使うことになりました。

私の母は福祉士です。障がい者の施設で働いています。その施設には車椅子の方が多いです。その中でも私が好きな人はみんなから「桃姫」や「桃さん」と呼ばれている人です。私は「桃さん」と呼んでいます。桃さんは可愛くて人気者です。雨の日以外にママさんバレーに行くときいて体育館にいます。

反対側のコートでは、桃さん含む母の働く施設の方の何人かがポッチャや風船バレーをしています。時々そっちの方へ行って一緒にしたりします。ポッチャは

佐世保市立柚木中学校 三年
森もり 山やま 和わ 奏かな

とても難しいです。力加減をしすぎてもしなくてもなかなか上手くできなかったりします。しかし、桃さんは代表選手だそうです。なのでとても上手いです。風船バレーは、技術が必要なものと、普段するバレーとはルールが違って難しく面白いです。つくださんという方は、母が勤める施設の職員の方なのですが、風船バレーの技術はともすごいです。私も教えていただいているのですが、なかなか上手くできません。しかし、風船のパスが繋がったときはとてもうれしいし、失敗しても励ましあったり笑ったりして、とても楽しいです。

このようにして、たくさん触れ合ったりしましたが、最初からみんなが心を開いてくれるわけがありません

ん。桃さんもそうでした。最初は私も中々話したりできませんでした。母から話を聞いたりしていたので、興味はあり、仲良くなりたかったのですが、なかなか出来ませんでした。そして、いつも通りにしてたある日の帰りに、毎回手を振っていたのでその日も手を振りました。すると、手を振り返してくれました。そして、嬉しくて母に伝えると、「多分やけど、少し心ば開かしたっちゃやない。」と言ってくれました。それを聞いて、とても嬉しくなりました。それから桃さんに会うことが楽しみになりました。

私は桃さんの笑顔が大好きです。なぜか障がい者の方の笑顔にはとても励まされます。母の職業柄、よく障がい者の方と触れ合ってきました。私はその触れ合いが好きです。一緒にいると楽しい。自然と笑顔になる。このようなことがよくあります。だから一緒にいることが好きです。これからもこのような機会を大切にしながら、続けていきたいです。

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

気遣いの仕方

長崎南山中学校 一年

あずま 直樹

小学校の頃、同じ学年に障害を持った子が二人いました。一人は、音がほとんど聞こえず補聴器を付けてもなかなか聞こえない子で、もう一人は発達が遅く言葉を喋ることも難しい子です。しかし、同じクラスになることはなく、あまり関わりがありませんでした。ですが、障害を持つ子と大きく関わりを持つことになった行事がありました。小大会です。

ぼくが選んだ競技はチームだったため、協力は不可欠でした。実際みんながある程度覚えるとみんな教えていました。しかし、障害を持った子はあまり良い気をしていませんでした。その子に理由を聞いてみるとうり返ってきました。

「みんなが自分のことを思って教えていることは分か

るけれど特別扱いではなく、みんなと普通に練習がしたい。だけど自分のために時間を割いてくれる人に対してこんなことを言うかわがまだまだと思われるかもしれない。」

ぼくは悩みました。みんなにこのことを言いたかったけれど、ぼくは内気な性格で言いにくかったです。友達に相談すると友達がみんなに言ってくれました。すると、みんなが考えを改めて障害を持った子とも普通に練習しました。結果は惨敗でした。特別扱いをしていたら勝っていたかもしれません。しかし、全員悔いはありませんでした。そこから学年全体で障害を持つ子への気遣いの仕方が変わっていく、ぼくのチームではない方もみんなにどうしてほしいか、自分をど

う扱ってほしいかを話していました。学年全体で言いやすい雰囲気が出ていたからだと思います。みんなはこれまで障害があることをかわいそうだと思っていましたが、小大会の後は、もし自分が障害を持っていたらと自分が同じ立場になっていたらどうしてほしいかを考えるようになりました。

今、ぼくは思っていたことを言ってくれた子やそれをみんなに伝えてくれた友達にとっても感謝しています。しかし、次にこういう状況になったときは理由を聞いた後に、自分でみんなに伝えられるようにがんばっていかうと思いました。

佳作

みぢかにバリアフリーを！

いさはやしりつまたいさはやちゅうがっこう
諫早市立北諫早中学校 二年

秋 あき 山 やま 実 み 優 ゆう

私には、生まれつき障がいを持った兄がいます。兄は病気のため、みんなのように立って歩くことができず、移動の時はいつも、電動車イスをつかって移動をします。

車イスでの移動となると、動ける範囲が狭くなりま
す。お店などに入る時も、スロープがないと入れませ
ん。私たちは、スロープがなくても、階段を使って入
ることができるので、スロープがなくても別に困るこ
とはありません。

でも、車イスの人たちは、スロープがないと入れず、
小さな段差などに引っかかる時もあるので、段差がな
くなると車イスの人もお店に入りやすくなります。
エレベーターに乗ったとき、高い位置にあるエレベ

ーターのボタンは、車イスでなかったら、別に何も問題
ないけれど、車イスの人は、ボタンの位置が高いと、
一人の時はボタンが押しづらいので、車イスの人が乗
りやすいように、工夫がしてあるエレベーターでは、
兄がとても助かっていました。

私は小学校六年生の時に初めて、兄を抱っこしまし
た。抱っこを初めてしたときは、父と母が横にいて兄
が落ちないように、下で支えるようなかたちで、見守っ
てくれました。

最初は、兄も不安そうな顔をしていたけれど、今と
なっては、兄も安心して、私に身を任せてくれるし、
父と母も安心して、補助なしでもできるようになりま
した。これから父と母は兄を抱っこするのが少しずつ

辛くなってくると思うので、私が家族を助けてあげようと思います。

今は、兄を車に乗せることができるようになることが目標です。

佳作

心の「輪」を広げる

諫早市立北諫早中学校 三年

もり
森 翔 平

今、この社会には様々なひとたちが一緒に暮らしています。わたしたちはそれぞれ「違い」はありますが「差」はありません。その「違い」を「差」だと勘違いしてしまうのはよくないことだと僕は思います。

お互いがお互いの違いを受け入れ合う社会をつくっていくことが大事です。そのいい例が東京オリンピック、パラリンピックではないでしょうか。パラリンピックでは違いを受け入れる工夫をした競技の競い合いをするのはもちろんのことだが東京のバリアフリーな街づくりには自分はとても感心を持ちました。階段や駅のホームでの電車の乗りおりのときのスロープなど、町中にあふれる違いを受け入れる姿勢にとても感動しました。

他にも左きき専用のハサミなどといった小さいバリアフリーなどといったものもあるのだとわかりました。

最初にも言ったように今、この社会には様々なひとがいて、一緒に暮らしています。そして、その違いを受け入れる工夫が町にはされています。ですが町だけではなくわたしたち一人一人の心にも受け入れる気持ちをもつことが一番大事だと思います。それがお互いがお互いの「違い」を認め合い「差」という考えかたを無くして違いを支え合う最高の社会を作るのが私たちの目指すべき社会だと私は思います。それを課題のひとつとしてさらなる改善に期待したいです。

長崎県知事賞(最優秀賞)

歩んだ道。そしてこれから歩む道

向陽高等学校

二年

服部 嵯介

「ヒコン」

「家族に障害者がいるって、どんな感じ？」

ある日、こんなSNSが届いた。誰がどんな目的で送ってきたのか・・・不快に感じた。なぜならば、私には障害を持っている妹がいるからだ。SNSは、人と人との繋がり的手段として利用されているが、平気で人の心を傷つけることができる。このSNSによって、これまで妹を通して体験したことを思い出していた。

妹は、障害を持って生まれてきた。これから待ち受けている発達障害、そして偏見という難しい問題に對し立ち向かっていかなければならない。家族は、不安を抱えながらも皆で妹を「守っていきこう。笑って過ごせるようにたくさん愛情を注いでいきこう。」とあの

日決意した。あの日、兄として妹がいじめに遭わないように守っていかねばならないという強い責任感が生まれた。あれから十一年が過ぎ、いつからだろうか。妹は発達障害の心を支えてくれる存在となっていた。妹は発達障害や言語障害を持っているが、自分の意思を一生懸命に何とか伝えようとする。その姿を見て応援しながらも逆に励まされることもある。「障害」できないことばかり」ではない。実際、妹は、家族のために食器を洗ったり、洗濯物をたたんでくれたりして私より家事手伝いをこなしている。「誰かのためにになりたい」と考えて行動する妹に、人に対する想いの強ささえ感じる。こんな妹の存在は、私達家族の癒しとなっている。

先日、久しぶりに小学校へ登校している妹の側を自転車ですべて通ってみた。二年前まで毎日妹と私が一緒に登校していた道である。四年間、登校支援してきた道。いろいろな事を乗り越えてきた道。決して楽しい事、嬉しい事ばかりではなかった。障害者という偏見に対し、辛い事、悔しい事も経験してきた。妹を見て避ける子、コソコソ悪口を言う子もいた。それらを見ないふり、聞こえないふりはできなかった。あの日の決意がいつも心の中に生き続けているから、一人一人に「皆違って皆いい。」を説明し続けた。偏見に対して、自分一人の力ではどうすることもできない事もあった。しかし家族、周りの友達、先生、地域の人々の支えがあり、乗り越えてきたと感じる。自分の体験を「心の輪を広げる体験作文」を通して伝え、周りの人への理解を求めた。そして今、私が願う共生への道へとつながり、一緒に歩んでくれている仲間達がいる。通学路をゆっくり歩く妹の横には、今は学年も性別も関係なく誰かが側にいてくれる。「さっちゃん、急ぐよ。」と声をかけられながら妹は、楽しく登校している。毎日一緒に時間を過ごすことによって妹の周りでは障害者に対する壁がなくなり心のバリアフリーが広がっている。一歩、勇気を持ってお互いを理解しようとする

心により、障害は特別な事ではなくなり、共生社会が広がっていくだろう。

これまでの事を思い出しながら、SNSの発信者は、もしかすると障害を持つ人と接することに戸惑い、私にコメントを求めているのかもしれないと思った。誰かの不安を取り除く助けになるのであれば・・・と思いいコメントに答えてみた。「家族に障害を持つ人がいてもいなくても変わらない想いがある。妹は、私の大切な家族の一員であるということ。」しかし、発信者からのコメントは届かなかった。しばらくして「ピコン」と音が聞こえた。それは、別の高校に通う中学時代の友達からだだった。私のコメントを見てメールを送ってくれた。また、友達は、それぞれの場所で共生の大切さを拡散してくれていることを知った。離れていても、何年経っても私の共生に対する想いに繋がっていている友がいることに勇気づけられた。一人でも多くの人に共生社会を知ってほしいと改めて感じた。

私は、これまで妹と歩んできた道によって人との心のふれ合いにたくさん出会うことができた。これらの出会いや経験をきっかけに私には、これから歩みたい道がある。それは障害者施設の看護師になるという道である。個々に違う症状や障害を持つ患者さんがいる

中で、言葉では表現できないメッセージを理解するため、また、意志を伝えることが困難な患者さんのつらさや不安を理解するため、私は優しさと強さを持って患者さんとその家族の心に寄り添える看護師を目指したい。今年看護科の二年生として臨床看護などの看護の専門分野を学んでいる。今、自分に課せられた小さな責任を一つずつ果たしていき、看護師になる夢と共に共生社会を実現するために努め前へと歩いていきたい。

これから私が歩む道である。

長崎県教育委員会教育長賞

自分と相手

私は中学校三年間、知的障害を持った女の子と同じクラスでした。彼女は誰かに自分から話しかけることはあまりありませんでしたが、話しかけられると、嬉しそうに明るく応えていたのを今でも覚えています。誰に対しても優しく接することができるようになりました。

三年間も同じクラスだったとは言え、彼女は彼女専用の教室で、先生と一対一で授業を受けることがほとんどだったので、他のクラスメイトと比べると一緒に過ごした時間はとても少なかったです。

これは、学校の掃除時間にその彼女専用の教室を掃除していた時の事です。掃除の担当者は六人くらいいて、その中に私もいました。黒板係、ほうき係、雑巾

係に分かれて掃除をしていました。

私はほうき係だったので床を掃いていました。すると、黒板係だった男の子が「いいなー簡単な問題ばかりで。」と言っているのが聞こえてきました。黒板を見てみると、小学生の時に習ったことがある算数の問題がいくつか書かれていました。おそらく、掃除時間前の授業で彼女が解いた問題だったのでしよう。別の男の子も黒板を見て、「あんな問題楽勝じゃん。」と言っていました。

私はたとえ彼女がこの場にいなくても、そんな事は言っただけでいいかと分かっていました。しかし、そんな二人の言葉を聞いて、何も言い返すことができず、黙っていました。それは、正直心の中で「確かに。」

長崎県立諫早農業高等学校 三年

東 理 奈
ひがし り な

と違ってしまっていたからです。

そう思ってしまったのは私が彼女の障害について理解していなかったからだと思います。私は彼女と一緒に授業を受けられる時、彼女ができないことや苦手なことなどはできる限り手伝うようにしていました。また、彼女が困っているように見えた時は明るく声をかけ、自分にできることは何でもするようにしていました。彼女の障害について理解しているつもりでした。しかし、実際は理解しているようで理解していませんでした。「自分にとっては小学生の時に習った簡単な問題だったとしても、彼女にとっては難しい問題だったのかもしれない。」ということすら考えることができていなかったのです。

中学校生活の中で彼女と一緒に過ごした時間を振り返ってみると、あの時こうしていれば良かったと思う場面がたくさんあります。ですが、いくら後悔したところで、過去を変えることはできません。未来なら変えることができると思います。たとえこの先、二度と彼女と関わる機会がなかったとしても、彼女以外の障害者の方と関わる機会はたくさんあるかもしれませぬ。もし、障害者の方と関わる機会があったら、自分の立場からだけでなく、相手の立場にもなってみて物

事を考えて行動したいと思いました。そして、少しでも後悔することがないようにしたいです。

私は高校で福祉の授業を受けています。授業で使用する教科書の「発達障害者の生活と支援」というページの一部に「人は強い力を持っており、そこに目を向けてその力をさらに伸ばす、苦手な部分は時間がかかってよいし、代わりの方法を選んでよい。」と書かれていたのを見ることがあります。

私はこの文章を読んでハッとさせられました。私は今まで生きてきた中で、他人の苦手としている部分のみに目を向けてしまっていたことがあったのです。

苦手な部分のみに目を向けると、その人のすべては見えなくなってしまうます。これからは優れたところや良い面に目を向けるようにし、苦手な部分は時間がかかってよいし、代わりの方法を選んでよいということをお忘れのないようにしたいと思います。また、障害の有無に関わらず、誰に対しても、力のあるところと苦手なところがある一人のかけがえのない存在として向きあいたいです。

長崎県社会福祉協議会会長賞

私が目指す未来

私の小学校の同級生に、授業中に教室を動き回ったり、気に入らないことがあると周りの人や物にあたりする子がいた。私はその子に対して、「どうしてじっとしていられないのだろう」「どうしてみんなの邪魔ばかりするのだろう」と、あまり良い印象を持っていなかった。

私には特別支援について学んでいる大学生の姉がいる。そんな姉からある日、ADHDという障害について聞いた。ADHDとは、不注意や多動性、衝動性を症状とし、見た目だけでは分かりにくい発達障害の一つである。これを聞いた時、私はその小学校の同級生を思い出した。当時のその子の行動に当てはまることばかりで、もしかするとADHDだったのかもしれない

長崎県立口加高等学校 二年
古瀬 優

いと思った。そして、その子に対する私の接し方は正しかったのだろうかと何度も自分に問いかけた。

障害のある人との関わりについて考えたとき、あるテレビ番組を思い出した。毎年八月の後半になると、二十四時間テレビが放送されている。二十四時間テレビは、障害者や途上国の福祉の実情を知らせるとともに、広く募金を集めて、思いやりのあふれた世の中を作ることを目的としている。番組内で、障害のある人が芸能人と一緒に何かにチャレンジするという企画が行われる。これによって、障害のことを多くの人が知ること、障害の有無に関係なく、誰もが物事を成し遂げる素晴らしい力を持っていることを視聴者に示すことができる。しかし私は、一つ思うことがある。健常

者が障害のある立場の人にスポットを当て、一方的に支えようとしているように見えるのだ。支える、支えられる関係ではなく、お互いが理解し合い、成長するという関係が理想である。

そのような関係を築いていくためには、偏見をなくすことが必要だと考える。「偏見」は相手のことをよく理解しないまま、自分の未熟な価値判断を下すために起こる。健常者は、障害者に対して「障害がある」ということを前提にして同情や憐れみを持って接してしまうことがある。だが、これも偏見ではないだろうか。私は小学生のとき、前で挙げた同級生に対して偏見を持って接してしまっていたと反省した。子どもだった私は、自分と違うと感じて距離を置き、行動だけを見て、その子のことを知ろうとしていなかったのだ。ここで、ある言葉を紹介したいと思う。「人の見た目は変わらない。変えられるのは我々の見る目。」この言葉は、「ワンダー、君は太陽」という映画の中に出てくる言葉だ。障害という変えられないものではなく、その人に対する自分の見方を変えることが大切であると、この言葉から感じた。

私たちが目指さなければならないのは、「インクルーシブな社会」である。「インクルーシブな社会」とは、

性別や人種、民族、国籍、障害の有無などに関わらず、誰もが社会の一員として分け隔てなく生活することができる社会のことを言う。そんな社会にするためには、それぞれの個性を大切にしながら、お互いを理解することが求められる。理解するということは、相手の表面的なものではなく、その人の感情や思いなど内面的なものまでくみ取る必要があると私は考える。

これから大学に進学したり、仕事に就いたりするうえで、障害のある人と出会うことがあるかもしれない。そこで、障害のある人と接するとき、偏見を持たずに理解し、相手を尊重したい。そうすることで、健常者が障害者を支えるのではなく、お互いに支え合って成長できるインクルーシブな社会が実現できるだろう。私は、その一員になりたい。

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

私にしかできないこと

向陽高等学校

一年

萩原

彪

私の母は生まれつき脳性麻痺という障がいがある。言葉をきれいに発することは可能だが、手足はほとんど不自由なため、家の中では椅子を外出の際は車いすを使って生活をしている。

私は物心がついた頃から「何故、自分のお母さんは歩けないのだろう」と疑問を抱いていた。しかし幼いながら、その疑問を母に問うことはできなかつた。なぜなら聞いて良いことなのだろうかと不安を感じていたからだ。

私が小学三年生の頃、学校の課題でバリアフリーについて学ぶ機会があった。私は幼い頃から見慣れていた車いすについての理解を深めようと本やネットを使って調べたことをまとめていた。その際、ふと母に対して疑問

に思っていたことが頭の中を駆け巡った。その時は不思議と自分が長年、胸に閉じこめていた思いを母へ率直に口にするのができた。母は微笑んでから自分は脳性麻痺という障がいであることと、過去に経験した辛いことを話してくれた。母は自分の身体を恨んだり、憎んだりするのではなく、「神様がこの身体に命を与えてくれたのにはきっと意味がある。だから私は私にしかできないことを成し遂げたい」と希望を語った。その時はまだ母の言葉をあまり理解できていなかった。

私が母の言葉の意味を理解できたのは、小学六年生、卒業を間近に控えている時期だった。卒業前に授業参観で発表する作文の内容に迷っていた時に母が助言をくれた。「彪にしかできないことを想像してみて。その想像の中

の自分と今の自分を比べてみて感じたことをそのまま作文にするの」

私にしかできないこと。あの時の母の言葉とリンクした。胸の中でモヤモヤしていたものが一気に晴れたような感覚だった。しかしその時は「私にしかできないこと」が明確にはわかっておらず、「自分なりの形で誰かの力や支えになりたい」という文を書いた。「誰かの力や支えになりたい」と思ったのは自然に浮かんできた思いだったのだが、きっと母の手伝いをしていくうちにその思いが心に生まれたのだと今では思う。

私が将来の夢をもったのは中学生になって間もない頃、母のリハビリについて行った時だった。何気なくただ黙って母がリハビリをしている姿を見て思った。「自分もリハビリの先生になったら母のような人の力になれるかもしれない」そこで私は理学療法士という職業に興味や憧れを持ち新たな自分への大きな大きな一歩を踏み出した。

中学生になると筋力がついて母を抱えることや母の日常生活動作の手伝いをするのも難なくこなすことができるようになった。しかし当時、私は部活に入っており勉強との両立に思い悩んでいた最中だったため、度々母の手伝いをするに不満を感じることもあった。

訪問介護に来てくださるヘルパーさんが少なく、弟と妹もまだ幼く、とても任せられるような年齢ではなかったため、結局は自分しかできる人がいないという現状を受け入れざるを得なくなった。

その瞬間、私は気づいた。母の手伝いをする事、母の願いを聴きいれることこそが「私にしかできないこと」であると。

十六年間、母と共に生活をし、互いに支え合いながら知ることのできた自分の力。母の手伝いをしながら得ることのできた「人の力や支えになりたい」と思える心。その中で身につけてきたこの技術を駆使して想像の中の自分を現実の自分にするために「今の自分にしかできないこと」を一つ一つ果たしていこうと思う。そして目標である理学療法士になり、より多くの人の「力や支え」になれるように母から教わったことを胸に一歩ずつ成長していく。

母にしかできないことは、「母自身として生きていく」こと。今の私にしかできないことは、「母自身として生きていく母を支える」こと、「理学療法士になる」という目標を達成すること。

この世界に生まれ、この身体に命を与えられた私の思いは母へ対する「感謝」で溢れている。

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

障害とともに生きる

私には中学二年生から卒業まで、ずっと近くで支えてくれた友人がいました。彼女には他に仲のいい友達がいるのに、なぜかいつも私の隣にいたのです。当時、友達と呼べるような人がいなかった私は、彼女の行動が不思議でしかたなかったです。私といると、コミュニケーションも円滑ではないこともあるし、私と話すことで迷惑をかけてしまうことになるし、はたして彼女にとって私と一緒にいる価値はあるのだろうかと思っています。

私には聴覚障害と、聴力が低下していく病気があります。先天性の病気で治ることはありません。私は、自分の障害、病気をコンプレックスに思っていました。中学校で生活していく中で、周囲の人と自分との差を

長崎県立ろう学校 一年

塚根 みづな

感じていたからです。周囲の人みんなが当たり前にできることを、私は当たり前でできず、虚しく思うことが多々ありました。そしてできない自分自身が嫌いでした。私は次第に周囲の人との間に壁を作るようになりました。先生やクラスメイトが聞こえづらい私のために聞こえたか確認してくれたり、メモに書いて教えてくれたりしていたのに、素直に受け入れられず冷たい態度をとってしまっていました。どんな理由があるうとも、人を傷つけていいはずはないのに、焦りや自己嫌悪ばかりが膨らんでいた当時の私はそのことにさえ気づけていませんでした。

そんな状況でも、彼女一人だけは何も言わず、ただ側にいてくれました。病気や障害についても深く追求

せず、しかし私が聞こえづらさを感じて困っている時は助けてくれました。面倒なはずなのにどうしてわざわざここまでしてくれるのか私には疑問でした。私は彼女と会話している時だけは自然体で居られて会話も弾みました。それから彼女という時間が長くなってきた、疑問こそ消えなかつたけれど、彼女にだけは心を許せるようになりました。彼女と話すとき笑顔になれて、楽しくて、一緒に居る時間がとても充実していました。

いつの間にか三学期も後半になり、卒業が近づいてきました。私には、この頃から教師になりたいという夢がありました。だから高校進学については悩みました。大学進学のためには進学校へ行き、たくさん勉強する方がいいことは分かっていました。しかし、普通校に進むのは、大勢の人がいる中で聞き取れるのか、という不安や、周囲の人の差を感じてできない自分を意識してしまうのではないかとという怖さがありました。だからといって、進学校ではないろう学校へ進学するのは、教師という夢を諦めることになるのかと考えるとしても迷いがありました。悩んだ末、私はいろろ学校への進学を選択しました。それを彼女に伝えるとき、私が悩んでいたことを知った上で、「いいんじゃない。」と受け入れてくれました。信頼している友人

に前向きな言葉をかけてもらえたので、自分の選択に自信が持てて安心することができました。

ある時、クラスの人が私に「高校はどこに行くのか」と尋ねてきました。私はその時「ろう学校に行く」と答えることができませんでした。友人以外の人に自分の状況について話したくなかつたからです。その結果、口ごもってしまいました。そんな私を見た友人が「みづなはろう学校に行くんだよ」と私に代わって伝えてくれたのです。すると「教師という夢は諦めたのか」とか「それって逃げではないのか」と言われてしまい、容赦のない言葉に私は深く傷つきました。「だから言いたくないんだよ」と思っていたところで、友人が切り出しました。「諦めたんじゃないよ、夢を叶えるためにそこを選んだ。だから、逃げたんじゃないよ」と。全く想定していなかつた言葉に度肝を抜かれました。と同時に、心の中に言葉では言い表せないほどの嬉しさとありがたさがどっと押し寄せてきました。私が思っている以上に彼女が私のことを思ってくれていたことが、嬉しくてたまりませんでした。そして、いつも彼女が近くにいるのが当たり前だと錯覚していた自分がいたこと、私は彼女がいたから救われていたことに気づきました。

私は、健常者の人たちは障害者に対して偏見を持っていて、障害者に関わるのが嫌なのではないかと思っていました。だから自分から健常者と自分自身の間に壁を作っていました。しかし、友人を見てみると実はみんながみんなそうではなくて、彼女のように「障害者」ではなく「ひとりの人間」として見て、接してくれる心優しい人ももっといるのかもしれないと思えるようになりました。

私は今、健常者の人と関わることへの怖さがなくなりました。ずっと嫌いだった障害者の自分も、少しは受け入れられるようになりました。この変化は友人がいたからこそ得られたものです。私も彼女のように障害のあるなしに関わらず、人と向き合える魅力的な人でありたいです。そして自分らしく、障害とともに生きていきます。

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

私の兄

長崎県立口加高等学校 二年

坂木 心

私には四つ上の兄がいます。祖父と父が病気で亡くなって以来、一家の大黒柱として彼の良さである明るい笑顔と優しさで家族を支えてくれています。

しかし兄には軽度の障害があります。見ただけでは全くと言っていいほど分かりませんが、学習障害という障害をもっています。

兄は小学生の頃から学習についていけなかったり、バランスのとれた文字が上手く書けなかったり、なかなか集中力が続かずソワソワしてしまったりします。また、聴覚過敏で雷や花火の音など大きな音が周りの人より大きく聞こえ、不安になり耳をふさぎ目をギョッと閉じて怖がってしまいます。

兄が障害をもっているということを知ったとき、小

学校低学年だった私は、

「え、なんてそんな事もできん？」

「そんなの簡単やん、誰でもできるよ。」

などと今思うと兄を傷つける言葉をたくさん口にしていました。その度に兄は悲しそうな顔をしていて、今でもあの顔は忘れることができません。しかし、当時の私にとって兄は友達に見せたくないという存在でした。

しかし、私は兄のおかげで障害のある方と何度も交流する機会があり、交流する中で私の考え方が徐々に変化していきました。

その中で一番に思うのは、「障害のある人は障害のない人と何も変わらない」ということです。

私が出会ったAさんはダウン症がある女性でした。その方はいつも施設の方と一緒に行動されていて、一人で考えて行動することがあまりできませんでした。しかし、その施設で野菜を育てたり、コースターや皿を作ったりしていました。障害があっても、できることはたくさんあるんだということを私はその方を見て感じました。

このことは、世の中の人全てがわかっているわけはありません。障がいがない人の中には、障害がある方を「自分たちよりも劣っている存在」だとみなし、差別をする人がたくさんいます。障害がある人は何もできないんだと思いきみ、差別をするのです。

誰にでも得意なこと、苦手なことがあるはずで、私は初対面の人とコミュニケーションをとったり、運動をすることが苦手です。また、誰にでも長所や短所があるはずで、

「障害」というのは一つの個性であると、私は思いません。

これからの未来は、本当にこのままでいいのでしょうか。「障害」は誰にでもある個性のうちの一つと考えてはいけないうのでしょうか。

一人一人が少しだけ考え方を試してみるだけでこれ

からの未来は大きく変わると思えます。今よりもっと明るく楽しく誰もが過ごすことのできる未来になると思えます。私たちが明るい未来を作りあげていくべきだと思えます。

私の兄は優しく穏やかな性格で、いつも頼まれたことに対して嫌な顔をせず

「いいよ」「仕方ないな。」

といって引き受けてくれます。そして、仕事から帰ってくると家に入るよりも前に洗濯物を取り込んで畳み、お風呂掃除をして何でも進んでやってくれて、私も母もとても助かっています。

兄はいつも家族のことをしっかり見てくれていきます。おもしろい話をして家族を笑わせてくれる兄、心配性でいろいろと話を聞いてくれる兄、ゲームが大好きで対決するといつも圧倒的に勝って自慢してくる兄、たまにけんかをしてあきらかに私が悪いのに、「さっきはごめんね」と先に謝ってくれる優しい兄、私はそんな優しい性格の兄が好きです。これからもたくさん迷惑かけられると思うけど、こんな私をよろしくね。絶対に差別になんか負けないでね。私と一緒にこれから差別のない明るくて楽しい未来を作っていこうね。

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

ごめんなさい。そしてありがとうございます。

向陽高等学校

一年

楠 本 奈 美

私は長女ですが、〇〇(名前)姉ちゃんと呼んでいる人が数人います。それは私のおばにあたる人です。私には、その数人のうちの一人のお姉ちゃんとの忘れられない、忘れてはいけない出来事があります。

私のお姉ちゃんは発達障害を持っていて、県内の施設を利用しています。施設を利用する方々と関わることは少なくなかったのですが、障がいを持つ方が沢山いらっしゃるなどについては小さい頃から理解している方だと思います。

しかし、あの出来事が起こるまで、障がいについてや障がい者との関わり方について知ろうとはあまり思ったことがありませんでした。実際、それについて考えた時間は学校の道徳の授業を含めてもあまりな

かったと思います。

その出来事は、私が小学五年生の時に起こりました。私はほぼ毎月、長期休みに離島にある祖父母の家に泊まりに行くのですが、そこはお姉ちゃんの実家でもあるため、お姉ちゃんの帰省とタイミングが合うことがしょっちゅうあります。その時もタイミングが合って、家で一緒に過ごしていました。これまでと変わらない、ごくごく普通の日でした。

お姉ちゃんは折り紙が好きで、折り紙を広げて遊んだ後、片付けずに離れた椅子に座って他のことをしていました。そこで私は折り紙を片付けるよう注意したのですが、お姉ちゃんの態度が一変し、口を聞いてくれなくなりました。なかなか折り紙を片付けてくれず、

ずっと髪の毛を触っているのを見てイライラした私は、

「お姉ちゃん！片付けて！」

と少し声を張り上げてしまいました。それに対してお姉ちゃんは、

「あーも、やぜか！」

と少し声を張り上げました。お姉ちゃんとの会話はそこで終わりましたが、私はお姉ちゃんが腹を立てているところを初めて見たので、少しびっくりしたと同時になぜ腹を立ててしまったのだろうと疑問に思いました。

少し時間が経って、その様子を近くで見ていた祖母に声をかけられました。祖母は私に「お姉ちゃんを子供扱いしちゃだめよ。お姉ちゃんは大人なんやけね。」と言いました。言われた直後はなぜこんなことを言われたのか理解が出来ませんでした。少しずつ、私があんな風に言ったせいでお姉ちゃんを傷つけたんだと理解しました。正直、どんな言葉でお姉ちゃんに声をかけたのかはつきりとは覚えていませんが、きつと上から目線できつい口調で、お姉ちゃんのプライドを傷つけるような言い方だったのだろうと思います。

数時間経って再び顔を合わせると、お姉ちゃんはい

つも通り私に接してくれました。気にしていないのかなと申し訳ない気持ちになりました。謝りたいと思っていたのですが、なかなか言葉に出来ず、謝ることが出来ませんでした。

長期休みが終わり、学校が始まる頃には、あんなに酷いことをしてしまっただけで謝ることも出来ないのも関わらず、私の頭の中にその出来事はあまりなかったように感じます。ただ、私は自然と図書室で障がい者についての本を手にとっていました。それから中学三年生まで、相変わらずその出来事を思い出すことはあまりありませんでしたが図書室で障がいに関する本を手に取り続けていました。私は自然と、障がいや障がい者などについて関心を持ち、理解すべきことだと認識したのだと思います。

あの出来事についてちゃんと思い出し、考えるようになったのは高校生になってからです。私は看護学生になり、患者さんとのコミュニケーションについて学ぶ機会が出来ました。それについて初めて教わった際、自尊心やプライドなどといった言葉を聞いて一番に頭に浮かんだのはあの出来事でした。私はそこでやっと、自分がどれだけお姉ちゃんに酷いことをしてしまったのか、なぜあの時に謝らなかったのか、なぜこの出来

事のことを約五年もの間考えなかったのか、それ以前にちやんと思いつき出さなかったのか、後悔と申し訳なさで情けなさをいっぱいになりました。それと同時に、祖母の言葉がああ時の何倍も心に響きました。ああ時、祖母もきつと傷付いていたと思います。それでも感情的にならずにあんなに優しく教えてくれたことに、本当に感謝しています。ああ出来事のことを思い出したときに祖母の言葉がそつと心に響くのは、そのお陰だと思えます。

私は今、ああ出来事に対して、もちろん後悔も大きいですがとても感謝をしています。ああ出来事のおかげで障がいについて考える時間が増え、人とのコミュニケーションについて考える時間も今増えています。ああ出来事は、将来看護の仕事をする上で、これから生きていく上で、私を支えてくれると思っています。

私はお姉ちゃんと祖母に本当に悪いことをしてしまいました。ああ大切な経験とそれに対する後悔や感謝の気持ちと、お姉ちゃんと祖母の優しさに対する感謝の気持ちを忘れずに、これから先、生きていこうと思います。そして、これからは障がいのことについて、少しずつでも正しく理解していけたらなと思っています。

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

触れ合いを通して学ぶこと

長崎県立口加高等学校

二年

相良琴美

小学生の最初のころ、私はあまり障害ということや障害者というのが身近なことではなかった。身近な人に障害のある人がいないからだ。私が障害者の方とのふれあいに興味を持ったのは小学校の高学年ごろだった。

私が住んでいる南島原市には障害のある人のための施設がいくつかあり加津佐町にもあった。ある時、障害のある方々を行う夏祭りのボランティアのサポーター募集のお知らせがきていた。場所が自分の小学校だったというのもあり、参加してみることにした。あまり障害のある方と話したり触れ合う機会もなかったため不安もあった。当日、小学校に行くと、思っていたよりも多くのサポーターの方がいられていた。小学

生から大人まで年齢層は幅広かった。自分が担当する屋台が決まっていて持ち場についた。少しして多くの障害のある方が来られ夏祭りが始まった。自分が心配していたことは反対に障害のある方はとても気軽に笑顔で話しかけてくださった。普通の人と変わらないじゃんと思った。あまり普通の人などということばを使うのは良くないが、障害のある方と触れ合いがない私は初めてでコミュニケーションはあまりとれないかもと思っていたのでそう思ってしまった。また、そこで話すことがとても楽しいと思った。面白い話もするし、バカみたいに笑いもする、障害があってもいつも変わりなく笑顔で元気に明るくされている姿がその時私は一番印象に残った。自分が思っていたこととも

まったく違い、実際に話したり触れ合ったり体験しないとわからないこともあることがわかった。二、三時間の夏祭りはあつという間だった。私にとってこの夏祭りは新しいことに気付かせてくれた特別な思い出になった。それから次の年の夏には運動会があった。私は迷わず参加をした。昨年とあまり変わらないメンバーだった。一緒に走ることもした。踊ったり、二人で協力してボールを運んだり自分の運動会をしているのと同じ感覚だった。障害のある方も一生懸命走って、一生懸命踊って、すべてのことを一生懸命やっている姿を見て、いくら自分に不利なことがあってもあきらめてやめてしまうのではなく、自分なりの一生懸命で何事も取り組むことの大切さを知った。昨年と同じように障害のある方との夏祭りや運動会で多くの障害のある方と話したり触れ合ったり、一生懸命な姿を見て多くの大切なことを学ぶことができ、参加してみても良かったと思った。それから小学校までの登下校で夏祭りや運動会で話した人を見かけることが多くあり、今までも会っていたのかなと思うと自分が普段見ている何気ないことも変化したんだと思った。その方も自分から話しかけて下さり「がんばって」とか「いつてらっしゃい」など気軽に声をかけて下さりこれも近所の人

や地域の人とのつながりだと思い、そのつながりが少しでも強くなったと思うととてもうれしくなった。今はコロナウイルスの影響で、夏祭りや運動会が中止になってもう三年間くらい行けてないので寂しいし、行って多くのことを話したいけれど高齢者も多いから今は我慢しないと思う。ただでさえコロナで多くの人と触れ合ったり、どこかに行ったりすることができなくなっているので小規模でもいいから何かしたいと思う。

また私のように、まだ障害についてあまりわからない、触れ合ったり、話したりしたことがなく身近に感じないという人のためにももっと良いところなどを発信していくことが大切だと思うし、学ぶこと知ること、新たな発見を通して障害を持つ方も持っていない人もどちらも成長していけると思うからそういうことが今後も大切だと思う。今はバリアフリーやユニバーサルデザインなど障害のある人となない人が共に生きていける社会になりつつあると思うのもっともっと広がりみんなが楽しく生活できるようになるといいと思う。コロナがおさまったらボランティアなど自分から積極的に取り組みたい。

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

感謝よりも感謝

長崎県立諫早農業高等学校 二年

藤田 菜優

小学一年生の時に、ある男の子と出会いました。教室に入った時に一つだけ形の違った机が並んでいて、なんてこの机だけ違うのだろうと幼いながら感じていました。すると、車いすに乗った男の子が笑顔で教室に入ってきたのです。そのころ、幼かった私は、初めて車いすに乗った男の子を見て驚いたのを今でも、はっきりと覚えています。でも、その男の子はいつも元気で笑顔で明るくて、まるで太陽のような存在でした。

もちろん、行事も一緒に楽しみました。運動会では、一緒に走るといことはできませんでしたが唯一、ダンスだけは全員で踊ることができました。車いすに乗った状態では、ありましたが同じようにバンダナを

つけ衣装を身につけ踊りました。

こうやって、毎日一緒に過ごしていく度に気づいたことが多くありました。車いすで過ごす毎日、決して簡単なことではありません。私が通っていた小学校には、エレベーターが設備されており、上り下りで不自由なことはあまりありませんでした。しかし、体育館への移動の時には、エレベーター側の廊下を通らなければいけないため少し大変でした。でも、その男の子は毎日笑顔でした。なかなか上手く話することができなくても、一生懸命に会話をしてくれて、毎回元気をもらっていました。

一年生から二年生に進級して、その男の子への理解も少しずつ深まっていきました。生まれつき足が不自

由で言葉も上手く話せない。先生から、そう聞かされた時に一年間一緒に過ごしてきて、自分なりに理解してきたつもりでした。でも、先生が介助するのがほとんどで私達は、何もしていないのだと気づきました。そこで、私は自分なりに動いてみることにしました。まず、積極的に介助のお手伝いをしました。小学生の私には、荷物を持つことや運ぶこと、楽しくコミュニケーションをとることしかできませんでしたが、その男の子のお母さんは、「いつもありがとう」と毎日のように声をかけてくださいました。

小学三年生に進級してからその男の子は、転校することになりました。もう、会うことはできないと思っていたのですが、学期ごとに一度だけ交流という時間を先生が作ってくださいることができました。小学校高学年になってからインフルエンザウイルスなどでなかなか、会えない時期もありましたが、久しぶりに交流ができた時に車いすではなく、歩行器で歩いてきたのです。お出迎えに行った時に、びっくりしたのを今でも覚えています。いつも笑顔で明るいのは、変わらずに一生懸命に歩いてくるのです。その姿に毎回、勇気付けられました。

中学生になっても交流することができ、会うたびに

成長していく姿をひしひしと感じました。

毎回、その男の子のお母さんが「ありがとう」と言ってくれます。でも、私はその男の子と出会えたおかげで今の自分がいると思っています。その男の子と出会っていないならば車いすとの出会いも障害者との出会いもありませんでした。それに、その男の子に毎回元氣と勇気をもたらしていたのです。このように感謝される側は、「その子からもらったものの方が多いということ。」「感謝されるよりも感謝することが大切だということ。」「障害を持った男の子と出会えたことで気づくことができました。」

車いすの男の子だけでなく、私のクラスには、知的障がいをもつ男の子もいました。まず、関わるのが難しく話が上手く噛み合わないことの方が多い日々でした。もちろん、運動も苦手な上手いかないと感情をそのまま出してしまふこともあり始めは、関わりたくないと感じていました。しかし、毎日過ごしていくうちに理解していくことでその子なりの良さが見えてきて学年が上がるたびにクラスの雰囲気も変わり始めた気がしました。

この二つに共通するのは、相手を理解していくことで見る世界が広がり感謝されるより感謝することの方

が増えていくということ。私のように、幼い時から障がい者との関わりをもつことで新たな発見、知識を得る喜びを感じることも今の私達の世代には、重要になってくると思います。

佳作

出会い、関わり成長する

これから私が生きていく中で、どんな人とどのくらい出会い関わるのだろうか。ただすれ違っただけでも、その出会いが私の何かを変えくれる時がある。

私が登下校で利用しているバスに時々視覚障害を持つ人が乗ってることがある。ガイドヘルパーの腕にぎり、ゆっくりと乗車してくる。バスの中でも、頻繁に耳元で声をかけたり、手をにぎっていたり、視覚障害を持つ方が不安にならないようにコミュニケーションをとっているように見えた。視覚という大切な感覚が失われている中で、あんなに普通に生活するには心から信頼できるガイドヘルパーさんがいることが大切なんだろうと感じた。視覚障害を持つ人にとってガイドをしてもらうことはその相手に命をあずけてい

長崎県立諫早農業高等学校 三年
管野未空

ることと同じように思える。どんな状況であっても信頼している人が身近にいることの重要さを知った。私は授業で福祉の勉強をしているし、実際に体験をしたこともあるため一つ障害を持っているだけでどれほど生活に支障があるかは、ある程度知っている。しかし、全ての人が福祉を学んでいるわけではなく、全然障害のことを知らない人もいる。そんないろんな人がいる世界で障害を抱え生活するのは困難も多いだろう。

ある日のバスの運転手の行動に私は胸があつくなつた。杖をついているおばあちゃんがバスから降りようとしている時「すべりやすいですから気をつけてくださいね。横の手すりを持って降りるといいですよ。」と言った。また、視覚障害を持つ人が降りる時には、「足

元、気をつけてくださいいね。そこから階段が二・三段ありますよ。」と声をかけていた。こんな行動は誰でもできることではないと思う。少しずつ障害や福祉について理解されるようになってきた一方、やはりそれらに対する偏見や差別はまだあり、冷たい目を見せる人もいる。そんな中あの運転手さんは自ら声をかけ相手を思いやった。こんな人が増えてくれればいいのと思った。

「普通じゃないから」「おかしいから」そういう勝手な理由で、相手を傷つける。何事も自分だけのものさしてはかたてはいけない。その人にとっては、目が見えないこと、耳が聞こえないこと、理解するまでに時間がかかること、さまざまな障害と共に生活していることが普通なんだ。目に見える外部の障害を持つ人であれば私でも相手のことを気遣うことは簡単だ。けれど、内部障害は本人やその家族など身内しか分かっていない場合が多い。もしかしたら、私がこれまで出会った人の中にも内部障害を持った人がいたのかもしれない。障害をもった人の中には、幼い頃から持っている人や急に障害を抱えることになった人など様々だ。そして、歳をとっていくとどんな人でも何かしらの障害を発症する。けっして障害は他人事で済まされ

るものではなく、今まで元気であっても、急に病気になるか障害がでたり、誰がいつなってもおかしくないことであることはしっかり頭に入れておきたいと思う。

高齢化が進んできたことにもなって、少しずつ福祉の視点が改善されてきている。障害への理解が深まり偏見が完全に無くなったとはまだ言えないと思うが、障害を理解しよう、障害があってもなくても同じ一人の人間である、共に協力し合いながら生活しようという空気になってきたのは間違いない。バリアフリーが推奨され、障害をもった人でも過ごしやすい環境が作られてきている。しかし、まだ障害を持った人にとって不便であることもあるだろう。さらに誰にとっても過ごしやすい場所にする環境づくりは必要だと思う。そして物理的なバリアを改善すると共に最も重要になってくるのは、障害を持っている人と持たない人が共に心のバリアをフリーにしていこうだと思おう。誰もが心のバリアを無くし、自分の意志を示し、自由に生活することができる社会になることで、多くの人と出会い、関わり成長していくことができると思う。そして、そんな未来も決して遠くはないと私は思う。

佳作

虚心坦懐

私は今まで十六年間生きてきて障がい者と関わりを持ったことがあまりありません。しかし、会ったことがある人が一人いて、保育園と小学校が同じだった女の子で、その子は自閉症という発達障害を持っている人でした。私もその頃はまだ幼かったのであまり記憶はないけれど保育園で遊んだり、一緒に学校に行ったり、学童で会って遊んだりしてとても楽しかったのを覚えています。その頃はまだ、障害を持っている方の気持ちや深く考えたりすることは無かったと思うし、偏見や差別的な意見を実際に見たり聞いたりすることも無かったので、フラットな感覚で誰とも接することができていたと思います。しかし、成長するにつれて嫌なものや見たくないものまで自然に理解すること

ができるようになって、周りの意見などに流されてしまいうことも増えました。

二〇一六年七月に発生した障害者施設殺傷事件から五年が経過し、少しずつ風化されつつあるこの事件について、当時の私は障がい者に興味を抱いてはいませんでした。連日のように報道されていたので今でもよく覚えています。この事件で十九人の命が奪われました。犯人は「障がい者是不幸であり社会にとって不要な存在」と話していたそうです。私はこの事件について調べていくうちに、自分の考えが分からなくなりました。たしかに、障がい者も好きで障害を持って生まれてきた訳じゃないのに、理不尽な理由で自分の存在を否定されるのは辛いだろうと思います。ですが、

長崎県立諫早農業高等学校 二年

高橋美祈

どうしても障がい者の気持ちは完璧には知ることはできなくて、自分の気持ちの中に差別的な気持ちが絶対に無いかと聞かれるとそんなことはないと思います。少なからず、障がい者のことを特別視してしまっていたり、必要以上に優しく接していたりします。その優しさも突き詰めていくとただの偽善だし、ある程度「していい事」と「してはいけない事」の区別がついてきたからこそその偽善だと思います。

そもそもなぜ障がい者に関わらず差別が起きてしまうのかを考えた時に、人と異なる部分を見ることによつて起きるのではないかと考えました。人と違うという理由で「その人は不幸なんだ」「かわいそうな人だ。」と決めつけて、差別的な言葉をぶついたり、変に同情したりして特定の人を見下してしまうのだろうと思います。でも考えてみると誰でも楽しくない時だってあるし、生きてると嫌なことだってたくさんある訳で、自分がいつでも幸せな事もないので一概に障がい者だからかわいそうだとも言えないと思います。「障がい者だからかわいそう」というのは固定観念に過ぎないし、人と違うからこそ、その人から学べることも多いと思います。

ここ数年で多様性という言葉をたくさん耳にするよ

うになりました。人それぞれの価値感を尊重してお互いに違うところも認め合う考え方であり、私はこの考え方がもつと色々な人に浸透されていくといいと思っています。そうするためには、色々な人と関わってコミュニケーションをとって、その人について知ることが大切だと思います。色々な人と関わる機会を増やすためにもボランティアに参加したり、自分から話しかけたり、コミュニケーション力を高めることも必要なことだと感じました。

今まではこんなに深く障がい者の気持ちについて考えたことは無かったですが、この作文を書くことによつて今の自分に必要なことを考えることができたので良かったです。これからの生活に生かしていきたいです。

ポスター

小学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）

長崎県教育委員会教育長賞

長崎県社会福祉協議会会長賞

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

佳作

佳作

おばまの森放課後等デイサービスそら

伊藤 悠晴

二年

……

63

おばまの森放課後等デイサービスそら

森下 夏実

二年

……

64

時津町立時津小学校

酒井 優和

五年

……

65

多機能型事業所なつの風

後田 蓮

一年

……

66

おばまの森放課後等デイサービスそら

本多 陽太

六年

……

67

佐世保市立鹿町小学校

西村 萌々菜

六年

……

68

おばまの森放課後等デイサービスそら

井上 新葉

四年

……

69

南島原市立有家小学校

松島 花純

六年

……

70

おばまの森放課後等デイサービスそら

町田 大剛

二年

……

71

おばまの森放課後等デイサービスそら

矢崎 はるか

三年

……

72

おばまの森放課後等デイサービスそら

長田 薫琉

四年

……

73

中学生部門

長崎県知事賞（最優秀賞）

長崎県教育委員会教育長賞

長崎県社会福祉協議会会長賞

長崎県身体障害者福祉協会連合会会長賞

長崎県手をつなぐ育成会会長賞

長崎県知的障がい者福祉協会会長賞

長崎県精神障害者家族連合会会長賞

長崎県精神障害者団体連合会代表賞

長崎県身体障害児者施設協議会会長賞

佳作

佳作

佐世保市立福石中学校

佐世保市立宮中学校

佐世保市立福石中学校

長崎市立琴海中学校

おばまの森放課後等デイサービス

平戸市立平戸中学校

佐世保市立福石中学校

壱岐市立石田中学校

佐世保市立福石中学校

おばまの森放課後等デイサービス

長崎市立琴海中学校

吉浦純愛 三年 …… 74

土居大河 一年 …… 75

森下拓海 二年 …… 76

牧野瑠奈 二年 …… 77

芦塚志保 二年 …… 78

橋口紗英 一年 …… 79

牟田穂乃花 二年 …… 80

中上怜美 一年 …… 81

水谷桔梗 二年 …… 82

川内晴天 三年 …… 83

片山真花 二年 …… 84



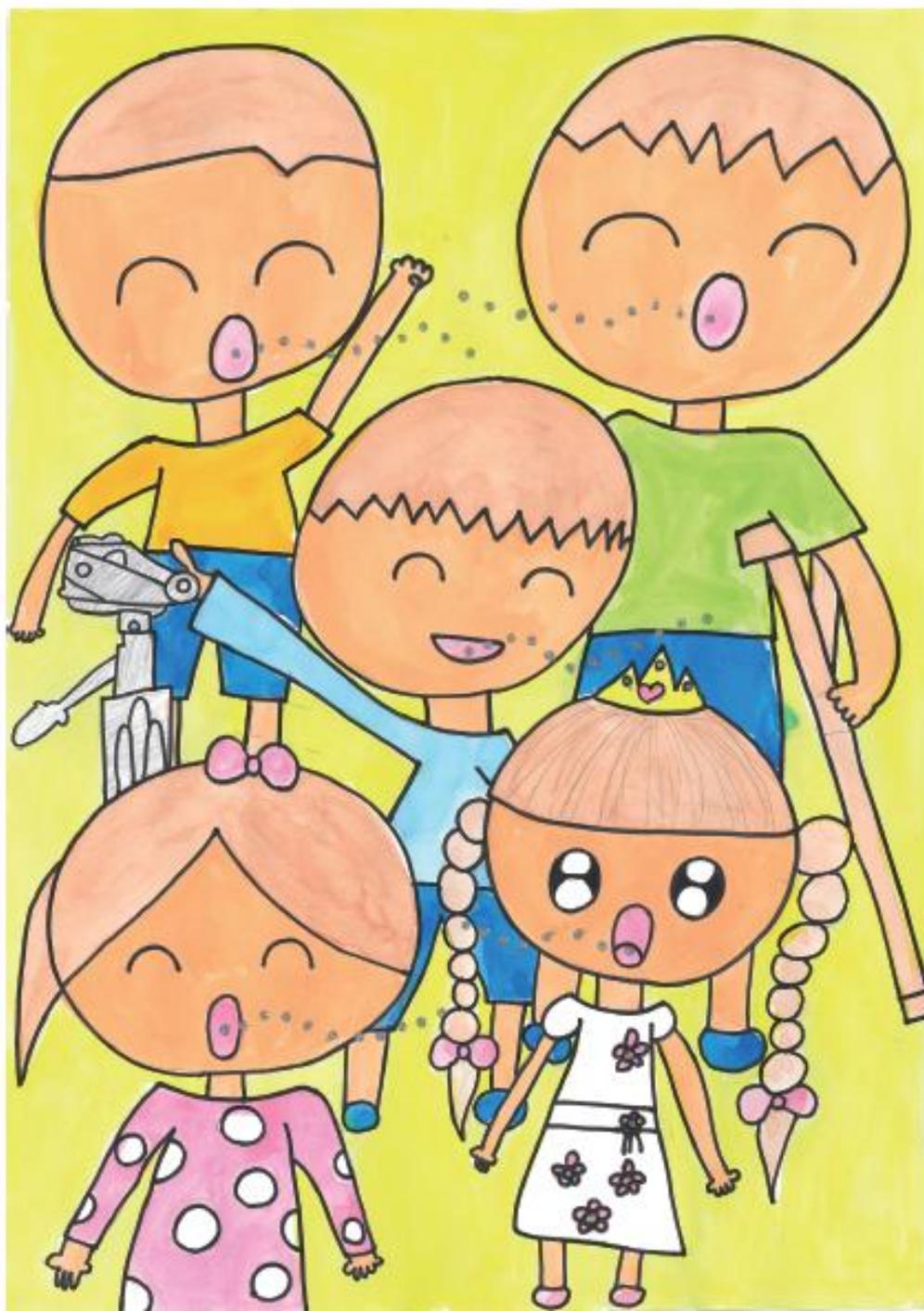
「カマキリをつかまえたよ」

おばまの森放課後等デイサービスそら 2年 伊藤 悠晴



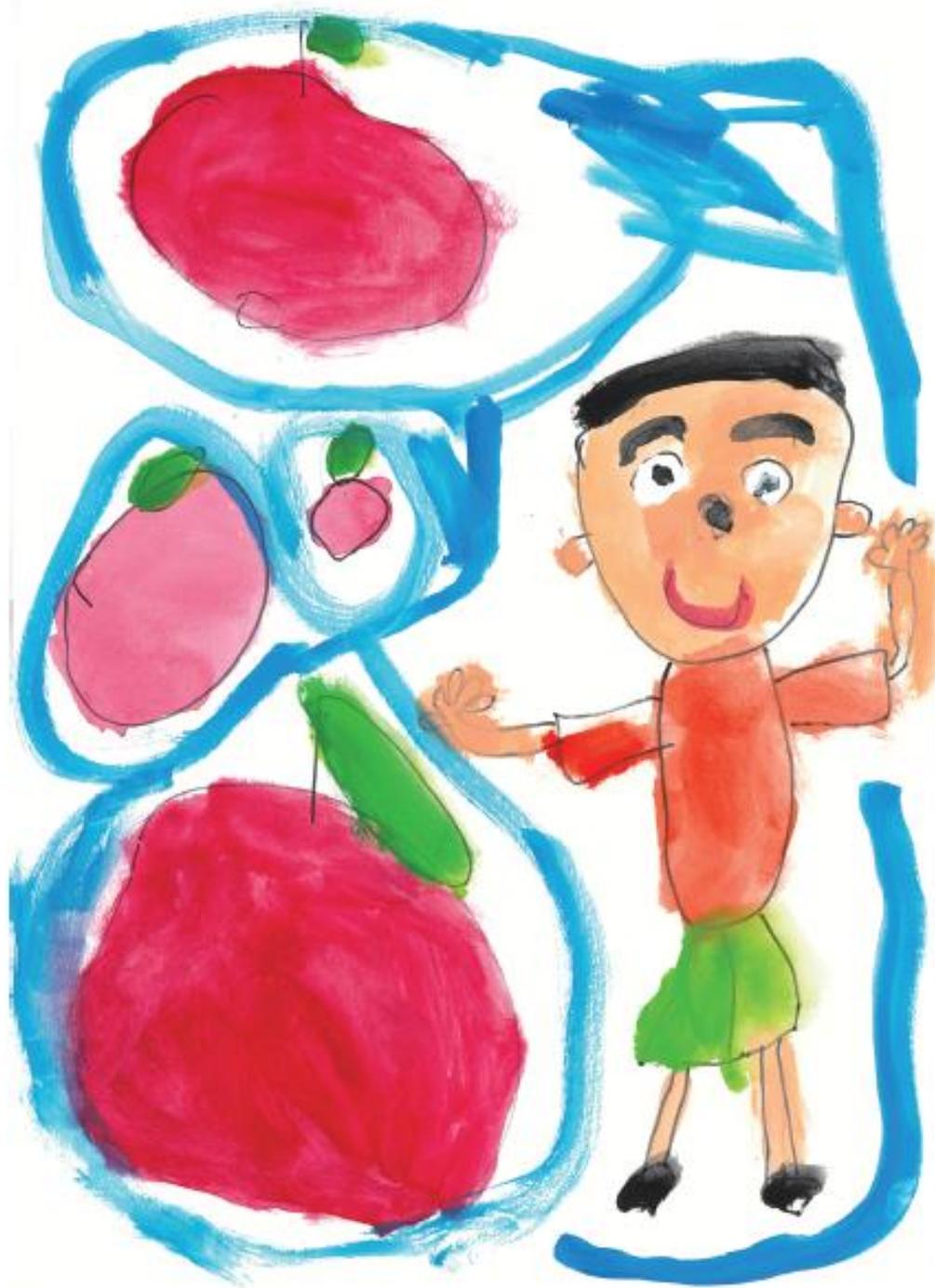
「ピアノが弾けるようになったよ」

おばまの森放課後等デイサービスそら 2年 森下夏実



「みんなであたおう」

時津町立時津小学校 5年 酒井優和



「りんごだいすき」

多機能型事業所ななつの風 1年 後田 蓮



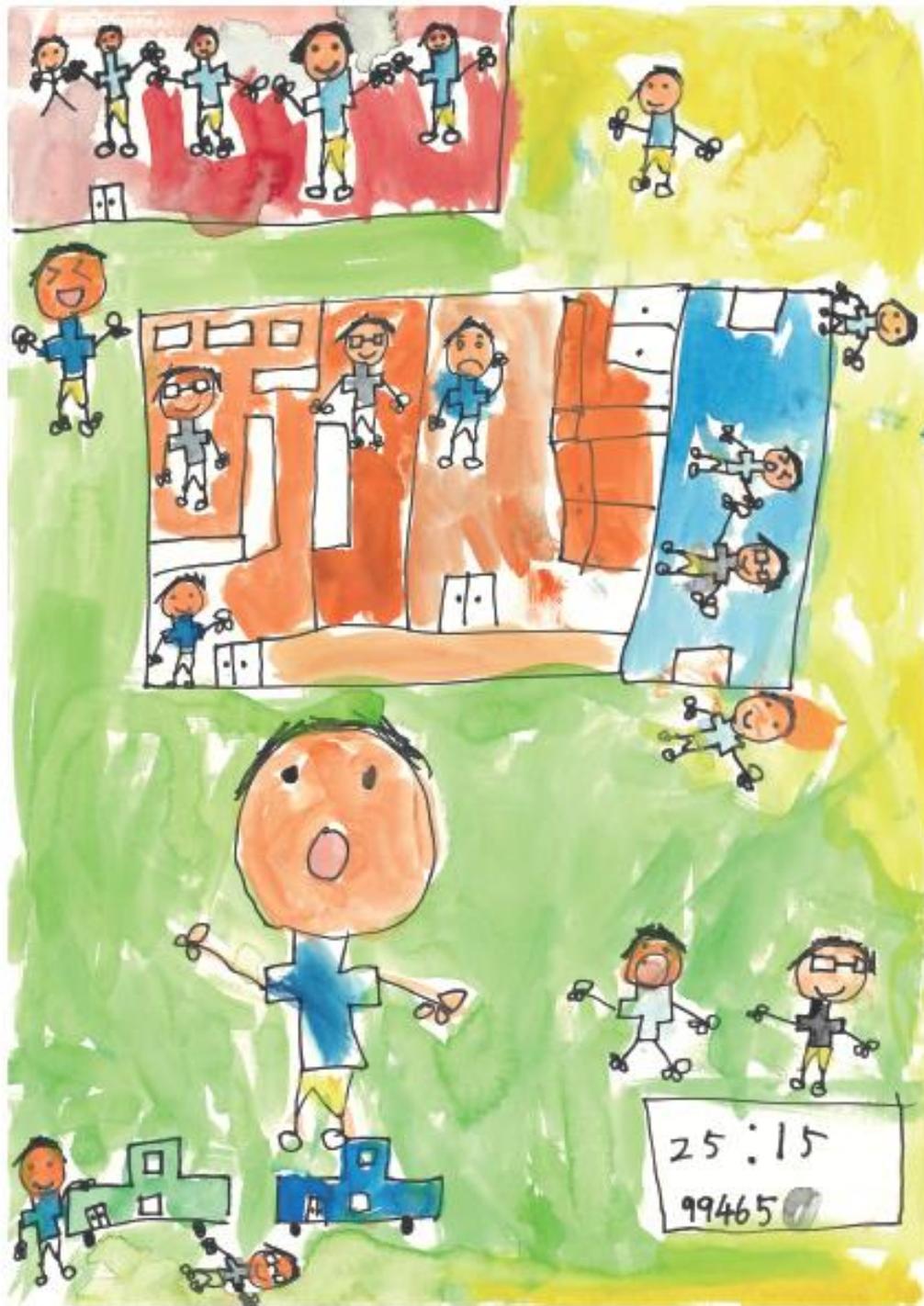
「おうち作り」

おばまの森放課後等デイサービスそら 6年 本多陽太



「だれもがかがやく」

佐世保市立鹿町小学校 6年 西村 萌々菜



「楽しいそら」

おばまの^{もりほうかことう}森放課後等デイサービスそら 4年 ^{いのうた}井上新葉



「知っておこう!! 障害者マーク」

みなみしまばらしりつありましようがっこう 南島原市立有家小学校 6年 まつ ばら 花 純



「メダカを育てるよ」

おばまの森放課後等デイサービスそら 2年 町田大剛



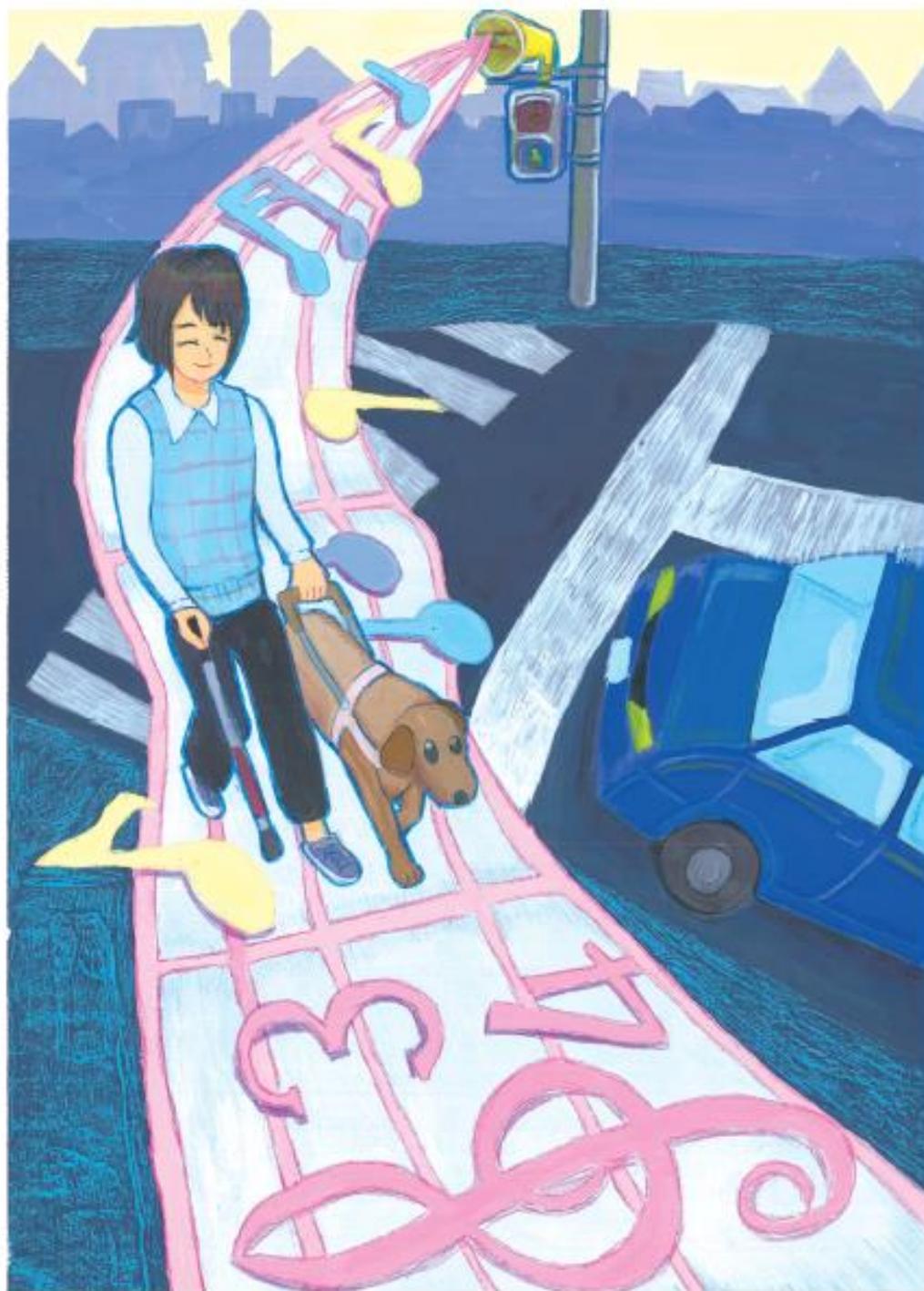
「チョッパーのお散歩」

おばまの森放課後等デイサービスそら 3年 矢崎 はるか



「ランチ作り」

おばまの森^{もりはらのこども}放課後等デイサービスそら 4年 長田 薫 琉



「理想に近い世界」

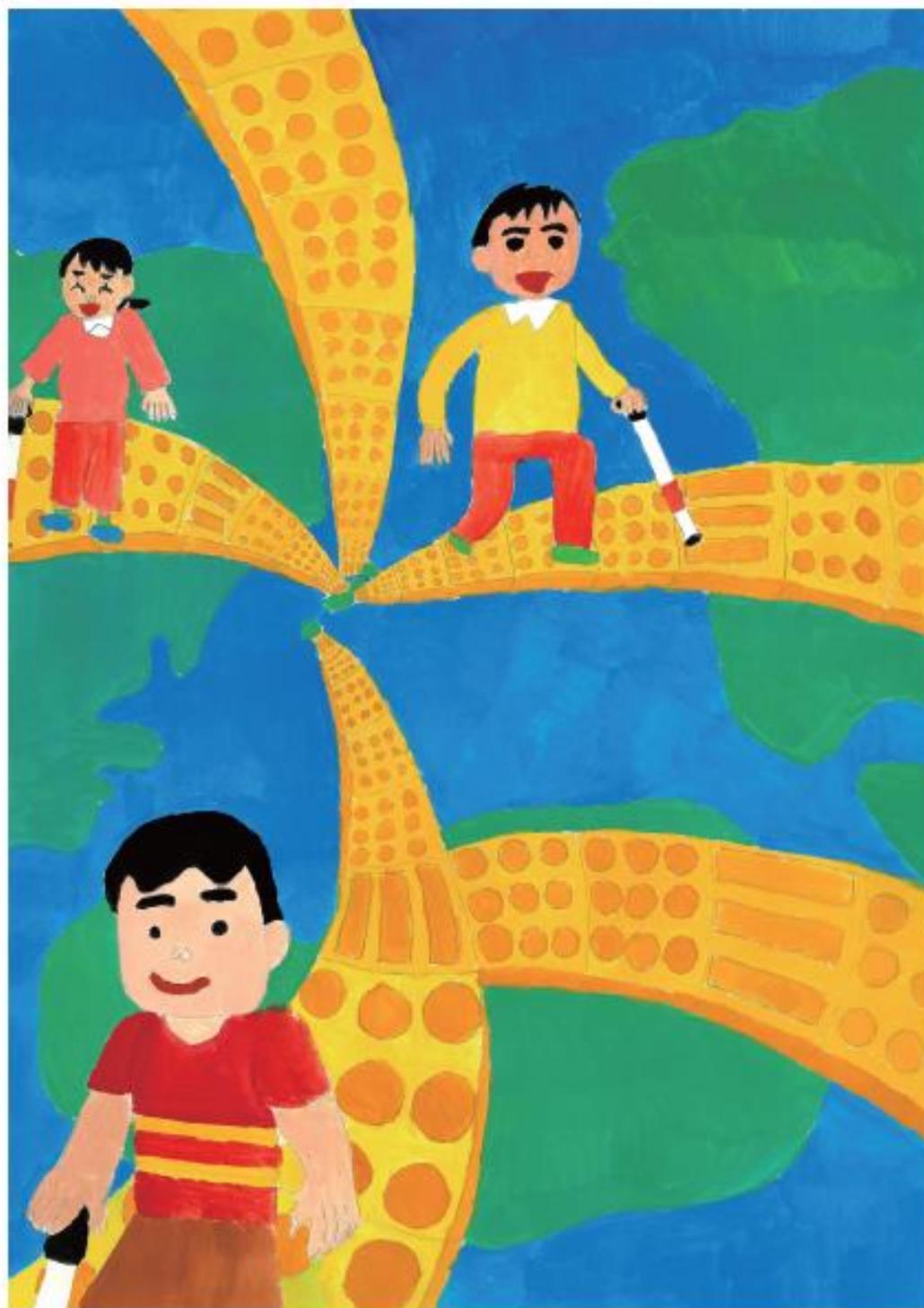
佐世保市立福石中学校 2年 吉浦純愛



「みんな、仲間」

佐世保市立宮中学校 1年 土居大河

◎中学生部門◎ 長崎県社会福祉協議会会長賞



「自由な道を」

佐世保市立福石中学校 2年 森下拓海



「みんなが笑顔のスポーツを」

ながさきしりつじんかいちゆうがっこう 2年 牧野 瑞奈
長崎市立琴海中学校 2年 牧野 瑞奈



「ぶどうの木を植えたよ」

おばまの森^{もりはらふもと}放課後等デイサービスおおぞら 2年 芦塚志保



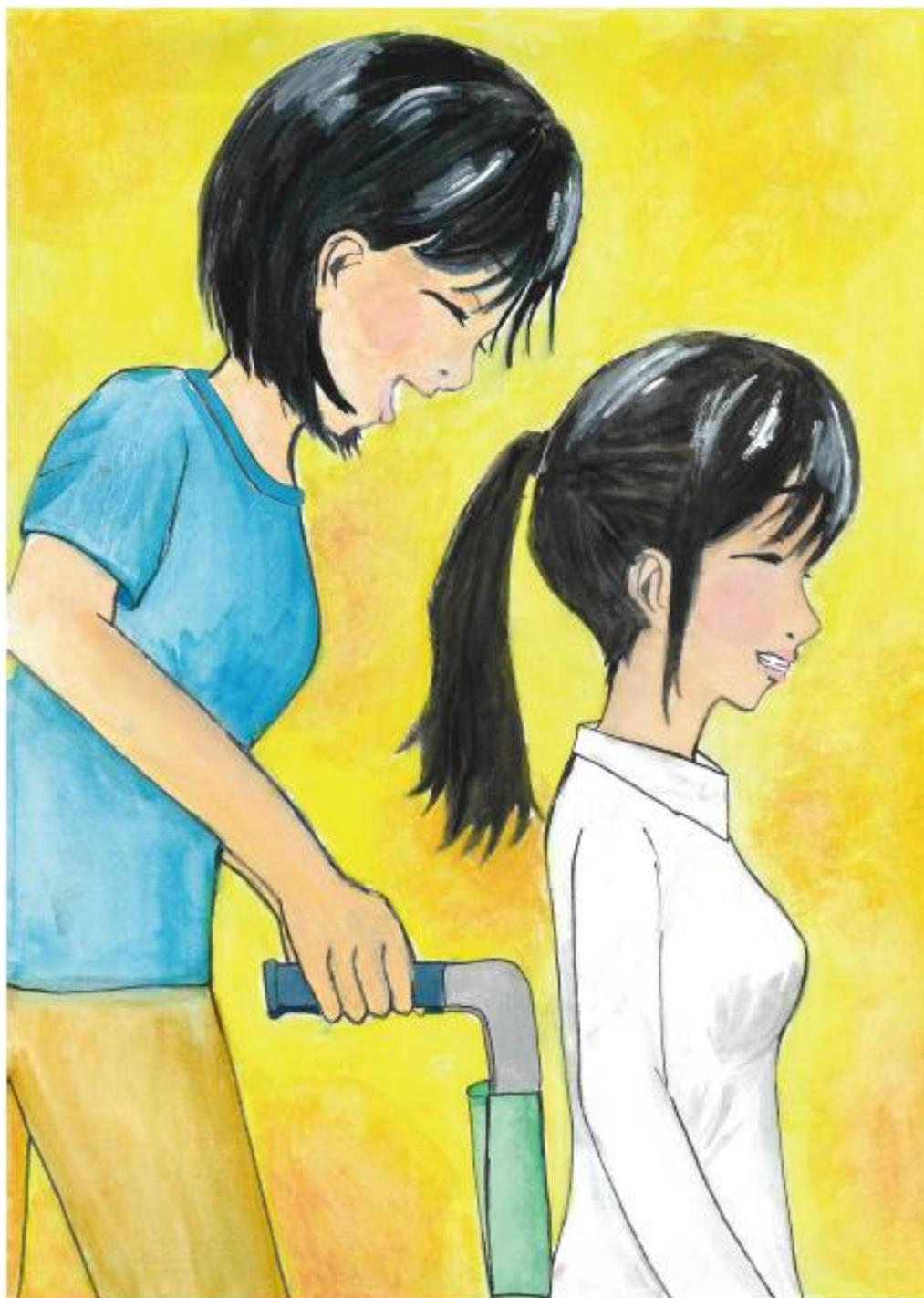
「あいさつ」

平戸市立平戸中学校 1年 橋口 紗英



「限界を超えて 垣根を越えて」

佐世保市立福石中学校 2年 牟田 穂乃花



「共に笑う幸せ」

い き し り つ い し だ ち ちゅうがっこう 1 年 中 上 怜 美



「車椅子では越えれない大きな壁」

佐世保市立福石中学校 2年 水谷 桔梗



「大好きなカルタ遊び」

おばまの森放課後等デイサービスおおぞら 3年 川内晴夫



「あっ危ない、一声かけて」

長崎市立琴海中学校 2年 片山真花

編集後記

本県では、障害のある人に対しての理解を促進するための施策の一環として、毎年「心の輪を広げる体験作文」と「障害者週間のポスター」募集を行っておりますが、本年度は、作文に一一八編、ポスターに四十四点のご応募をいただき、厳正な審査の結果、応募作品の中から作文については小学生、中学生、高校生・一般、ポスターについては小学生、中学生の各部門において、それぞれ受賞作品を選定いたしました。この作文・ポスター集は、これらの入賞作品計五十二編・点を収録したものです。

作文の中における表現については、障害に関する用語に係る不適当な表現の有無について留意しておりますが、「心の輪を広げる体験作文」は、「出会い、ふれあい」の体験を前向きに捉えた作品であること等から、作者のご意向を損なわないようできる限り原文のとおり掲載させていただきました。

収録された作品は、いずれも、障害のある人の日々の思いや障害のある人に対する優しさ、思いやりが込められたものばかりで、この作文・ポスター集が、学校、職場、地域など様々な場において多くの方々にご覧いただき、障害や障害のある人に対する理解が深まり、相互理解が一層推進されることを期待しております。

結びに、この作文・ポスター集の編集にあたり多大のご協力をいただきました関係者の皆様方に対し、厚くお礼申し上げます。

令和三年十二月

長崎県福祉保健部障害福祉課

令和3年長崎県障害者週間作文・ポスター集

出会い、ふれあい、心の輪

令和3年12月発行

編集・発行 長崎県福祉保健部障害福祉課

〒850-8570 長崎市尾上町3番1号

(電話) 095 (895) 2451

(FAX) 095 (823) 5082

障害者に関するマークについて

街で見かける障害者に関するマークには、主に次のようなものがあります。
皆さまのご理解とご協力をお願いします。

障害者のための国際シンボルマーク



障害者が利用できる建物、施設であることを明確に表すための世界共通のシンボルマークです。マークの使用については国際リハビリテーション協会の「使用指針」により定められています。※このマークは「すべての障害者を対象」としたものです。特に車椅子を利用する障害者を限定し、使用されるものではありません。

ヘルプマーク



外見から分からなくても援助や配慮を必要としている方々が、周囲の方に配慮を必要としていることを知らせることで、援助を得やすくするよう作成されたマークです。(JIS規格)
ヘルプマークを身につけた方を見かけた場合は、電車・バス内で席をゆずる、困っているようであれば声をかける等、思いやりのある行動をお願いします。

盲人のためのシンボルマーク



世界盲人連合で1984年に制定された視覚障害のある人のための世界共通のマークです。視覚障害のある人の安全やバリアフリーに考慮された建物、設備、機器などに付けられています。信号機や国際点字郵便物・書籍などで身近に見かけるマークです。

耳マーク



聞こえが不自由なことを表す、国内で使用されているマークです。聴覚障害のある方は見た目には分からないために、誤解されたり、不利益をこうむったり、社会生活上で不安が少なくありません。このマークを掲示された場合は、相手が「聞こえない・聞こえにくい」ことを理解し、コミュニケーションの方法に配慮をする必要があります。

ほじょ犬マーク



身体障害者補助犬法の啓発のためのマークです。身体障害者補助犬とは、盲導犬、介助犬、聴導犬のことを言います。「身体障害者補助犬法」により、公共の施設や交通機関はもちろん、デパートやスーパー、ホテル、レストランなどの民間施設では、身体障害のある人が身体障害者補助犬を同伴するのを受け入れる義務があります。

オストメイトマーク



人工肛門・人工膀胱を造設している人（オストメイト）のための設備があることを表しています。オストメイト対応のトイレの入ロ・案内誘導プレートに表示されています。このマークを見かけた場合には、そのトイレがオストメイトに配慮されたトイレであることについて、ご理解、ご協力をお願いします。

ハート・プラスマーク



「身体内部に障害がある人」を表しています。身体内部（心臓、呼吸機能、じん臓、膀胱・直腸、小腸、免疫機能）に障害がある方は外見からは分かりにくいので、様々な誤解を受けることがあります。このマークを着用している方を見かけた場合には、内部障害への配慮についてご理解、ご協力ををお願いします。

「白杖SOSシグナル」普及啓発シンボルマーク



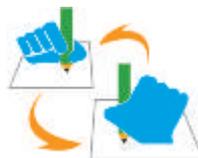
白杖を頭上50cm程度に掲げてSOSのシグナルを示している視覚に障害のある人を見かけたら、進んで声をかけて支援しようという「白杖SOSシグナル運動」の普及啓発シンボルマークです。白杖によるSOSのシグナルを見かけたら、進んで声をかけ、困っていることなどを聞き、サポートをしてください。

手話マーク



手話を必要としている人を対象としています。5本指で「手話」を表す形を採用し、輪っかけて手の動きを表現しています。ろう者等からの提示は「手話で対応をお願いします」の意味です。窓口等での掲示は「手話で対応します」、「手話でコミュニケーションできる人がいます」等の意味です。

筆談マーク



筆談を必要としている人を対象としています。相互に紙に書くことによるコミュニケーションを表現しています。当事者等からの提示は「筆談で対応をお願いします」の意味です。窓口等での掲示は「筆談で対応します」の意味です。